

初年次教育学会 15周年記念誌

初年次教育学会の来し方行く末

【巻頭言】

「はじめに」 藤田 哲也

【企画 1】

初年次教育学会 15周年記念事業座談会

山田 礼子・安永 悟・藤本 元啓・藤田 哲也・川島 啓二・西村 秀雄・菊地 滋夫・加藤 みづき

聞き手：山本 啓一

【企画 2】

初年次教育実践交流会の来し方行く末

「発足の経緯」 藤本 元啓

「初年次教育実践交流会の成果」

「実践交流会 in 北陸からみえてきた開催のヒント」 垣花 渉

「『地域活動活性化』に期待すること」 安永 悟

【その他】

初年次教育学会におけるこれまでの役員一覧

目 次

はじめに	1	
企画1 初年次教育学会 15周年記念事業座談会		
座談会の趣旨	2	
北米のFirst-Year Experienceとの出会い	3	
学会設立の機運の高まりといくつかの源流の出会い	6	
「初年次教育」という言葉の定着と広がり	13	
学会立ち上げ後の歩み	17	
初年次教育学会の成果とこれからの課題	25	
重要課題① 初年次教育の研究をどう推進するか	29	
重要課題② 高大接続にどう取組むか	31	
学会の未来像—初年次教育を推進するプラットフォームへ—	33	
企画2 初年次教育実践交流会の来し方行く末		
発足の経緯	藤本 元啓(崇城大学)	40
初年次教育実践交流会の成果		
2014年度(平成26年度)	42	
2015年度(平成27年度)	44	
2016年度(平成28年度)	46	
2017年度(平成29年度)	47	
2018年度(平成30年度)	49	
2019年度(令和元年度)	52	
2020年度(令和2年度)	55	
実践交流会 in 北陸からみえてきた開催のヒント		
垣花 渉(石川県立看護大学)	59	
「地域活動活性化」に期待すること 安永 悟(久留米大学)	60	
初年次教育学会におけるこれまでの役員一覧		
	62	

はじめに

藤田 哲也
(法政大学)

2022年は、初年次教育学会が2008年に設立されてから15年目にあたる、節目の年であった。本学会ではこれまでに、5周年では「初年次教育の現状と未来」を、10周年では「進化する初年次教育」を記念出版として、いずれも世界思想社から刊行してきた。これらの記念出版は、それぞれ当時の初年次教育を取り巻く教育政策や現場で持ち上がっていた課題等の動向をとらえ、理論面と実践面から初年次教育そのものを牽引する意図を前面に打ち出して編集されたものであった。

今回、15周年記念事業として、新たに同様の記念出版本を編集・発行することも検討されたが、それよりも本学会の15年のあゆみについて、きちんと振り返りを行い記録に残そうということになり、本書「初年次教育学会の来し方行く末」を制作することとなった。2008年に本学会の設立発起人となっていた20名のうち、2022年度においても理事として本学会の運営に深く関わる立場にあるのは9名と既に半分以下になっており、本学会の設立時の事情に精通した人間が学会運営の中心から離れてしまうのも時間の問題であることに鑑み、これまでに公刊あるいは公表してきた資料には記述されていない、裏事情のようなことも含め、学会の15年のあゆみを資料として残すことを周年事業と位置づけた次第である。

ちなみに、10周年の記念出版である「進化する初年次教育」の16章にも、山田 礼子先生と安永 悟先生(ともに元会長)が本学会の10年の足跡をまとめてくださっている。その章とは趣を変えて、本書では会長あるいは学会事務局のメンバーとして学会運営に深く関わってきた8名の座談会を通じた回顧録という形式を取ることになった。聞き手として座談会を仕切ってくださったのは、2022年度に将来構想実行委員長として15周年記念事業を一手に引き受けた山本 啓一先生(北陸大学)であった。山本先生にはこの座談会のセッティングだけでなく、学会HP上で過去の学会誌に掲載された論文・記事から必要な情報を検索するための「初年次教育学会学会誌掲載データインデックス」の作成も担当していただいた。大変にお忙しい中、座談会の文字起こしからレイアウトをはじめとした、本記念出版全般についてご尽力いただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げたい。

本書では上記の趣旨の座談会(企画1)だけでなく、「初年次教育実践交流会」についても、発足の経緯からこれまで蓄積してきた成果、今後期待される展開などを「企画2」としてとりまとめさせていただいた。全国規模で開催される年次大会とはまた異なるアプローチで、初年次教育の実践事例の普及に貢献してきた活動の数々について、15周年の節目に記録を残すことには、振り返りはもちろんのこと、今後の本学会の目指す方向性の一つを再認識することにもつながる意義があるといえよう。

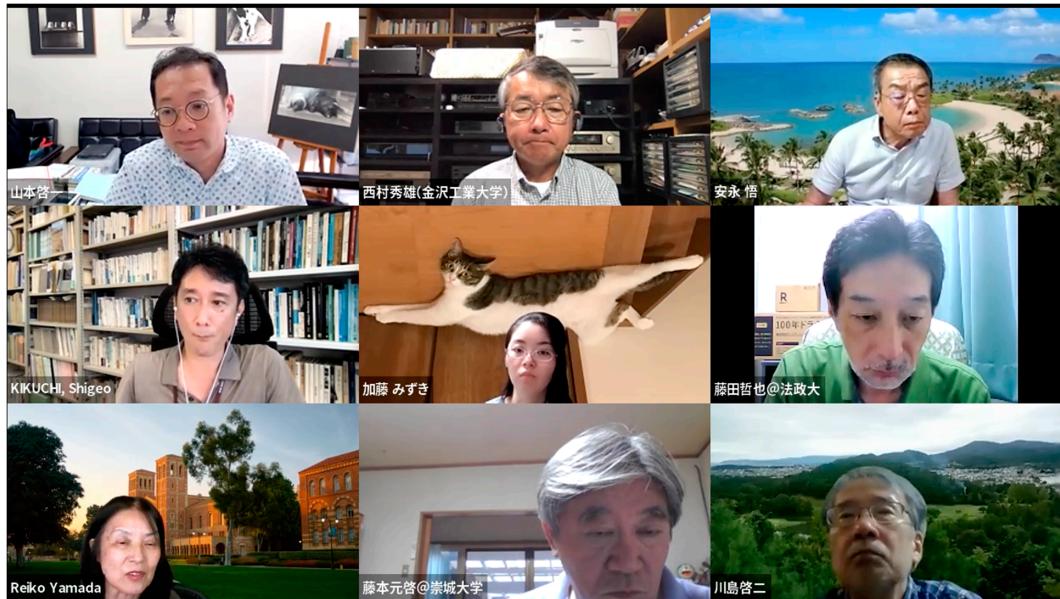
また、毎年度刊行される学会誌には掲載されている情報ではあるが、設立以来の役員(理事)および事務局等で学会運営に尽力されてきた会員の方々のお名前を一覧できる形でとりまとめている。大変多くの方からの献身的な支援によって本学会が15周年を迎えることができたことに感慨もひとしおである。もちろん役員ではない個人会員・機関会員・賛助会員の皆様からの積極的な学会への関与があってこそ、本学会が持続できることはいうまでもない。本学会に関わるすべての方に改めて感謝の意をお伝えするとともに、今後も変わらぬご支援を賜りたく、お願い申し上げる次第である。

(初年次教育学会会長)

<企画1>

初年次教育学会 15周年記念事業座談会

実施日時(オンライン) 2022年8月9日(火)・17日(火)



参加者(敬称略;所属は2022年度のもの)

山田 礼子(同志社大学)
安永 悟(久留米大学)
藤本 元啓(崇城大学)
藤田 哲也(法政大学)
川島 啓二(京都産業大学)
西村 秀雄(金沢工業大学)
菊地 滋夫(明星大学)
加藤 みづき(多摩大学)
聞き手: 山本 啓一(北陸大学)

座談会の趣旨

この座談会は2022年8月の9日と16日にオンラインで開催されました。学会の歴代会長、事務局長、そして事務局の皆様に、初年次教育学会の15年間を振り返り、特に学会創設前夜からの歩みを語っていただきました。これまで本学会を牽引されてこられた方々の長年にわたるご努力と学会への大きな貢献に心から感謝申し上げます。座談会を通じて、本学会が日本の初年次教育にどれほどの影響を与えてきたかが鮮明になりました。また、この座談会は、今後の初年次教育および学会の今後の方向性についてヒントにもなるかと思われます。

北米の First-Year Experience との出会い

山本

まず先生方には、学会の立ち上げ前夜や初期の頃の学会のミッションなどのお話を伺わせてください。15年前に初年次教育学会が立ち上がった時のいきさつですか、当時の雰囲気とか、経緯ですか、お話を伺いできればと思うんですけれども、やはり山田先生でしょうか？

山田

一番お詳しいのは川島先生だと思うんですけども、ただ少しは存じておりますからお話ししましょう。

最初に初年次教育を知ったのはですね、First-Year Experience という言い方をアメリカがしていた時に、たまたま濱名先生と私とそれからもう一人、私の前任校で一緒に働いていた方とハワイで開かれる First-Year Experience の学会に参加したんですよね。参加したら、5周年

記念誌の中でも紹介していますが、ジョン・ガードナーという先生がおられましてね。その先生が First-Year Experience とか First-Year Seminar を大々的にやってらっしゃったわけなんですよ。たくさんアメリカ人たちが参加していて、とにかく驚いたのがその時の印象でした。2000年か2001年だと思います。

なぜそういう大会に行くようになったか今思い出しました。私が、前任校の現在は桃山学院教育大学の前身のプール学院大学で、助手の方と共に、「自己の実現」という科目を新しい大学で担当したんです。その時にもう亡くなられた元京都大学の先生でいらっしゃった小林 哲也先生、イギリスの大学の副学長をされていたんですけども、その先生がプール学院大学の初代の学長で戻ってこられた時に、イギリスでの経験をもとにそうした「自己の実現」っていう First-Year Seminar に近い科目を全学レベルで設置するということで、多くの教員がそれに携わるということになったんです。誰も科目としての経験がなかったものですから、みんなで研究会を開きながら、担当する教員で調べていったところで、First-Year Seminar っていうのがある、First-Year Experience っていうのがあるっていうことに行き着いて、それでそれがハワイで開かれるからっていうことで、皆さんと一緒に行ったんですよね。それが最初だったと思います。

それで初めて First-Year Experience に触れて、これはすごいことをしてるなと思って、そういう関係のテキストとかもいっぱい持って帰ったんですよ。当時日本では「分数のできない大学生」とかいうのが話題になり始めていた時で、学力の多様化とか、モチベーションが低下した学生がたくさん入ってくるとか、そういうことが話題になり出していたので、もっと調べていく必要があるかなっていうので、それから何年も調べるようになつたんですね。

そういうしてうちに、ジョン・ガードナー先生とも親しくなって、彼は当時 First-Year Experience の研究センターをノース・キャロライナ大学で持っていたんですよね。他方、サウス・キャロライナ大学でも、トランジション研究センターに First-Year Seminar



山田 礼子 (同志社大学)

がありました。そこが大々的に取り組んでいたので、それを調査しに私は参りました。そこでランディ・スイング先生とすごく親しくなって、私を連れていろんなどころを回ってくださったんですよ。これが、アメリカのFirst-Year SeminarとかFirst-Year Experienceを知るようになったという経緯です。

その後調査なんかもしながら、日本でも応用可能性を探りました。そのあと、多分川島 啓二先生と濱名 篤先生と川嶋 太津夫先生が、何かの学会に行ったときに夜3人で話をして、川島先生が、「いやこれはもうやっぱり日本でも初年次教育学会を作らなきゃいけないんじゃないかな」という話になったと。そこには私いませんでしたから、よく存じてませんけれども、そういうように聞いています。それが始まりだったと思うんですね。

それから玉川大学の菊池 重雄先生をはじめとして、玉川の方たちも早くからFirst-Year Experienceの学会に関心を持って、大学を挙げて来られてたんですよ。だからハワイでも玉川の人たちとお会いしました。玉川大学は初年次教育をカスタマイズした形で広げようとしていらっしゃったと思います。そういうこと也有って菊池先生なんかにもお声がかかったんだと思いますし、ここにおられる藤本先生とか安永先生とか藤田先生とかにもお声がかかって。それからもうお辞めになってますけど、京都文教大学の中村 博幸先生もその時におられたと思います。それで初年次教育の設立を行うことになって、その第1回大会を同志社で行ったんですね。

その時にガードナー先生は来られないというお話だったので、アステイン先生にお願いしたら来てくださいまして。アステイン先生のお話っていうのは、カレッジ・インパクトなんですが、First-Year Experienceと関係がありますから、そういう形で基調講演していただいて、結構たくさんの方がご参加された大会だったように記憶しております。

抜けてるところいっぱいあると思うんですけど、安永先生とか藤本先生、藤田先生、西村先生もご存知だったら補足していただければと思います。

山本

学会誌の第1巻に目を通すと、当時の熱量みたいなものを感じられますね。多くの方が初年次教育に注目されて、学会設立につながったんだなというのはよく分かりました。山田先生がアメリカに行かれたり、ハワイに行かれたりというのは、First-Year Experienceの学会にご参加されていたんですね。

山田

そうです、そういうことなんですね。その後は井下 千以子先生も参加されていて、カナダでもお会いしたことありました。しかし、アメリカではその後First-Year Experienceの大会は縮小しちゃったんですよ。だから今の私の感覚で言うと、初年次教育としては普遍化した形になってるのは日本の方だと思います。アメリカは一時的なブームだったのかもしれませんね。カナダのバンクーバーの大会を行った時には本当に参加者も少なくなっていました。というのは、もともと多くの参加者は研究者というよりは、教職協働の人たちでした。教職協働とか大学院生とかこれから教員になっていくっていう人たちが多かったのですが、大学が補助金を出すわけで、それで来てらっしゃったんだけども、それがカットされた時期でした。そのため、参加者が減少したのでしょうか。今は、サウス・キャロライナ大学のトランジション研究センターが中心で大会を運営していますが、国際的というよりは国内志向に変化しているように思います。あのときはガードナー先生のカリスマ性

で、インターナショナルでした。

山本

山田先生の論文を拝見すると、アメリカでは First-Year Experience が 1970 年代から始まつたと書かれていますが、当時、アメリカの大学のユニバーサル化の進展っていうものから必然的に生まれていったということなんでしょうか。

山田

そうですね。私はそう理解しています。それとアメリカ独特のレイト・デシジョンっていう制度がありますから、入学したものの、やっぱり中退率がすごいわけですよね。リテンションが問題になっていたっていうことだと思います。日本のように最初からこういうことを学びたいっていうような形、つまりアーリー・デシジョンっていう形で入学しませんから、入学してから、これやりたいあれをやりたいとというように専攻分野を変えていく学生が多いのです。そういう学生たち、どちらかというとランドグラントの州立大学に入学している学生のリテンション率が高いっていうこともあって、First-Year Seminar でしっかりとモチベーションとか仲間づくりとかを行うことが必要だったのでしょうか。

山本

先ほど山田先生が 1990 年代にはハワイですごい熱気だったっていうふうにおっしゃつていて、その頃がピークだったっていうことなんでしょうか？

山田

そうですね。1970 年代で始まつたっていうのは特殊な大学だけだったと思うんですよね。だから結構、著名な大学なんかでも初年次教育という言葉を使っていないけど First-Year Seminar とかは提供していました。それが普遍化したのが 90 年代っていう感じですね。

山本

山田先生が手がけられた「自己の実現」という授業は、キャリア教育と言いますか、そういういった視点の授業だったんですか？

山田

私の前任校の学長がイギリスでご自分で作っていた科目を同じような形で設置したのが「自己の実現」っていう科目で、これは新入生全員が履修するようになっていました。当初は、具体的な中身が決まってなかったので、担当者である我々に任せられたのがきっかけで調べるようになったんですよ。

「自己の実現」ですから、心理学と社会学、教育学、それから文化人類学、そういうソーシャルサイエンス畠の教員が担当することになりましたが、みんなイメージを持っていませんでした。自己の実現ってまあ心理学的な言い方に近いかなと思うんですけど、要するに大学で自分を円滑に大学生活に合わせて実現させていくためにはどうしたらいいのかっていうようなことだったと思います。だからやっぱり、First-Year Seminar の最初のモチベーションをしっかりと持たせるという趣旨に近いかな、という感じはしますよね。それから自分のアイデンティティで将来何になりたいかっていう意味では、キャリア的要素も入ってきます。

山本

まさに今の初年次教育の原型ですね。

学会設立の機運の高まりといいくつかの源流の出会い

山本

さて、山田先生から、川島先生のお名前が何回も出てきました。川島先生も初年次教育を日本に導入していこうっていう機運を高めてこられた方だと山田先生からもご紹介があったんですけども、当時はどんな感じだったんでしょうか。

川島

海外の事情を紹介されてきたのは山田先生とか、濱名先生とか川嶋 太津夫先生だったというふうに思うんですけども、僕はちょうどその頃、国立教育政策研究所で皆さんいろいろな問題意識が交わるところにいて、日本でも大学の大衆化っていう段階をちょうど経ていた時に、様々な日本の問題状況というものと、初年次教育という仕組み、それから First-Year Experience といって「経験」という言葉を使うというところが当時の大学教育の考え方の中では非常に新鮮だったんじゃないのかなって思いましたので、その動きに私もついてった、引っ張っていったっていうより、ついてつたっていう感じで、いろいろ一緒にさせていただいたというふうに思います。



川島 啓二(京都産業大学)

山本

その時に、まず学会を立ち上げようっていう話になっていったんですね。

川島

そうですね。

山本

いろいろな選択肢がある中で、まず学会立ち上げを考えられたっていうのはどうしてですか。まずは研究会から始めるとかじゃなくて、一気に学会を作って、研究者を集めてっていう壮大な構想を描かれた背景ってどの辺にあったんでしょうか？

川島

あんまり深くは考えてなかったと思うんですよ。まとまりのある形を広めていくものとして、最初に学会という構想が出てきたんです。もちろん初年次教育学っていう学問体系があるわけじゃないので、いきなり学会というところに行くのはいかがなものかだとか、それから私の記憶では、山田先生とか川嶋 太津夫先生が学会っていうのは大変だからフォーラムみたいなのがあるんじゃないかなっていうようなことをおっしゃっていたような記憶があります。それに対してやっぱり組織としてきちんと恒常に財政基盤も含めて確立するのはやっぱり学会じゃないかっていうふうなことをおっしゃっていたのは確か濱名先生で、当時濱名先生は、今もそうでしょうねけれども、今以上にパワフルだったので、学会という考え方へ収斂していったのかなっていう。

それからマスコミでも、初年次教育を取り上げてもらいましたよね。私の記憶では、確かに日本経済新聞だったかな、濱名先生の記事が掲載されて、それはすごく象徴的な出来事だったのかなって思います。ご自身の大学で実践なさっていたし、それから教科書『知の

ステップ』を作られたということ。当時、藤田先生も京都光華女子大でそういう教科書を作られていたと思います。ちょっと前後関係がきっちりしませんけども、そういうムーブメントみたいなのがあって、学会結成に至ったというところで、あれよあれよという間に推薦人を20人ぐらいというところに行ったんじゃないかなって思います。

山本

学会設立前夜には、他の先生方はどんなことをなさってたんですか？ 藤田先生もその頃からすでにということですけど。

藤田

はい。僕は前任校は京都光華女子大学という、当時は学部2つと短期大学が併設されている小さな女子大で、いわゆる学力というよりレポートの書き方やノートの取り方という意味での学習スキルが足りてないために軌道に乗れないっていう学生を目の当たりにしていました。これは学習スキルに特化した教育を行う必要があるなと思って、2000年度に自主的にそういった講座を、教養教育を担当していたセンターの当時の同僚に声をかけて3人で立ち上げたんですね。最初は授業ではなくて課外講座として始めたので、学生も単位にならないし、我々もボランティアで。大学の上層部にやれって言われたんじゃないなくて、自分でやろうって決めてボトムアップで始めたっていうのが、多分独特のムーブメントなのかなと思います。

だから、別の観点から言うと、山田先生たちがハワイで刺激を受けていらっしゃったみたいな話は全く知らないところで、あくまでも現場的な必要性を感じて始めたということです。

それで2年目には教科書として『大学基礎講座』まで作成しました。最初のバージョンは2002年発行なんですね。2000年から課外講座として始めて、2年間やったところで、単位を出す授業として設置して、そのタイミングでこの教科書を作ったんですが、多分これが川島先生の目に留まって声をかけてもらったという流れかなと推測しています。

つまり、教育政策的な意味での必要性を感じ取った方が学会設立時のコアにいらっしゃって、その後すぐに初年次教育を実践的にされている方に声をかけて、実践レベルで活動している人と、抽象度が高いレベルで関心を持っている人とのバランス取ろうとされたんじゃないかなと推測してます。川島先生そのあたりの配慮というか、僕に声をかけてくださった経緯など、いかがですか。

川島

言われてみればそうかなっていう。そういう意識が働いて、つまりいわゆる高等教育畠の人たちだけではない、実際にやってる人たち、様々なバックグラウンドを持った人たちの集まりになるのが自然だろうっていうふうに思ってましたね。

藤田

この際ちょっと伺っておきたいことがあります。先ほど学会の設置じゃなくてもいろんな選択肢があったはずだと山本先生がおっしゃったのと同じようなことを、僕も長年表立って聞けないままモヤモヤしながら過ごしてきました。例えば大学教育学会の中の部会



藤田 哲也(法政大学)

としてある程度活動期間を経てから学会にという選択肢もあったのではないかと思うんですね。設立当時のメンバーの半分ぐらいは大学教育学会で精力的に活躍されていた方ですね。だからそういう大学教育学会内の部会という選択肢を取らずに、別の学会として設立しようというのは、結構思い切った判断だったのかなと思うのですが、大学教育学会との棲み分けは当初から考えてらしたんですか？

川島

大学教育学会の中でということを話し合った記憶はないですね。はい。

山本

初年次教育が実践寄りだからですか？

川島

いや。というよりも手っ取り早い方を考えるということなんじゃないのかなっていうふうに、今の私の理解ではそうですね。根回ししながらやるのは時間がかかるという、そういうふうな感覚があったんじゃないのかなという気がする。推測ですよ。

藤田

もう一つ、リメディアル教育学会が初年次教育学会の1年前に設立されているのですが、今たまたま資料があったので見てみたら、濱名先生が初代の理事に入ってるんですね、リメディアル教育学会の。初年度役員名簿にお名前が挙がってるのですが、おそらくすぐに抜けられていると思うんですけど、リメディアル教育学会との兼ね合いについては、学会の設立のときに議論されましたか？

川島

それはめちゃくちゃ議論したというか、濱名先生本人に来てもらえばよかったと思うんだけど、濱名先生はすごいこだわりを持ってられたというふうに思いますね。

山本

その頃、藤本先生は何をされてたんですか？

藤本

私の前任校の金沢工業大学で改革がスタートしたのは1995年です(当時は3学期制)。そのときに今までいう初年次教育科目として「フレッシュマンセミナー」と、「修学基礎能力演習」を必修科目としました。「フレッシュマンセミナー」はオリエンテーション科目、「修学基礎能力演習」は1学期間かけてレポートを作成してプレゼンを行う必修科目でした。教育改革は進んだのですが、受験者数があまり伸びず、大学もイライラしており、平成16年(2004年)に4回目の大きな改革を行ってポートフォリオを導入し、特色GPに採用されたのが、2~3年後ですかね。当時はプログラムの成果が必要でしたから。

そのときに文科省でポートフォリオの会議というか勉強会があって、そこで山田先生と濱名先生と初めてお会いしたのです。2007年の3月だったと思います。どうしてポートフォリオの話をしなければならないのかな、と思いながら行ったのですけども。その頃まだ初年次教



藤本 元啓 (崇城大学)

育という言葉はなかったと思いますが、1年生を対象とするポートフォリオの目的の一つが自己管理だったものですから、それが理由だったのでしょうね。文科省での会議で、高等教育局長も来てたと思います。文科省の役人の方々が20人ほどいらっしゃった記憶があるんです。その折に濱名先生と山田先生、もしかしたら川島先生もいらっしゃったのかもしれません。

その時に、「新入生を対象とする科目を推進する会をつくる計画があるので、具体的にまとまつたらご連絡します」というお話があったと記憶しています。ただその頃まで金沢工大では、いわゆる導入教育は別個にあり、今で言ったら何て言うんでしょう、リメディアルに近いのかな、そういうことは確かやっていましたが、そこがきっかけで、このお話を聞いた時に、これは面白いなと思いました。我々がやっている「フレッシュマンセミナー」とか「修学能力基礎演習」を合体させて、「修学基礎」を実施していましたし、現在もプログラムの原型はそのままで、内容は変わっているのだろうと思いますが、続いているはずです。平成16年度の改革で金沢工大の導入教育プログラムが大きく変わりポートフォリオを紹介した御縁と、初年次教育学会でやっていこうとすることとがほとんど一致したということで、私にお話が来たのだろうと思ってます。

山本

その時、藤本先生は初年次教育っていう言葉をご存知だったんですか？

藤本

いや、知らなかったです、まったく。

山本

先生ご自身がやってることに、あ、これって初年次教育って言葉が当てはまるんだみたいな。

藤本

そういう感じですね。全学の必修科目でしたので、担当の先生は結構いらっしゃいましたね。20何人いらっしゃったと記憶しています。ただ1クラス60～80名とクラスサイズが大きかったのですが、なんとなくちょうど時機を得た、という印象を強く持ちました。

山本

安永先生は、心理学をおやりになられていて、そこから教育分野に乗り出されていかれた方ですが、安永先生もその頃はすでにLTD(Learning Through Discussion；話し合い学習法)を初年次教育的な実践として始めていらっしゃったのですか？

安永

私の場合はきっと先生方とずいぶん違った経験と言いますか、ルートだったと思います。初年次教育学会に直接お声をかけていただいたのは藤田哲也先生です。いまお聞きしますと、川島先生から藤田先生に、そして藤田先生から私にお声かけがあったという流れを確認できました。

私自身は久留米大学の文学部創設にかかわったのが1992年です。ちょうど30年前になります。その時から、1年生を対象とした、今で言う初年次教育の科目を、学部として導入していました。「教養演習Ⅰ」と「教養演習Ⅱ」という



安永 悟(久留米大学)

名称でした。九州大学の先生方が中心になって創った学部なんですが、その時から始まつてたんですね。

もちろんその当時は初年次教育を知りませんでした。でも、1名の教員が大体10名から15名の学生を相手にしながら、まさに今やってる初年次教育のようなことを始めてしまいました。「教養演習」の内容は先生方に任されており、さまざまな内容がありました。そういうしているなかで、1994年にLTDに出会うんですね。LTDは研究のレベルから入っていきましたが、実践でもこれはきっと面白くなると思っていました。1995年のことです。

1999年に、全国から十数名の、いろんなジャンルの先生方、心理学を専攻していた方は2,3名しかいなかったんですが、言語学や国語学の先生とかですね、そういう方がLTDの実践を見学に、久留米に来られたことがあります。私はその頃に協同学習に出会うわけです。だから私にとってLTDが先で、協同学習は後になります。

その後1年間カナダに留学して帰ってきてから、協同学習を専門とされる先生方との交流が非常に深まりまして、2004年に日本協同教育学会を立ち上げました。これは今も続いている。その後、これも藤田先生からのお声かけいただいたのですが、日本リメディアル教育学会を立ち上げるので一緒にやりませんか、ということで参加しました。記録によれば、私は2004年から2007年まで日本リメディアル学会の理事をやっていました。

日本リメディアル教育学会の先生方との付き合いは、その後ずっと続いてます。一番の思い出は、久留米大学で初年次教育学会の全国大会をやらせていただいた時、ほぼ同時期に福岡大学で日本リメディアル教育学会の全国大会がありまして、相互に交流したことを覚えています。

日本協同教育学会を2004年に立ち上げて、2005年の日本リメディアル教育学会の立ち上げに参加し、その後、初年次教育学会を藤田先生に教えていただきました。その頃の時代の流れみたいな、雰囲気みたいなものがあったんじゃないかなと思うんですね。ほぼ同じ時期にですね、似たような学会の立ち上げが3つも続いたことは非常に印象深く思っています。私にとっての「出発」っていうのはその辺になりましょうかね、はい。

山本

学会設立に結実する流れの背後に、いろいろな水脈が存在してたんだなっていうことを感じさせられます。

川島

ちょっと戻るんですけども、一年次教育っていう言葉を使ってる人たちがいて。玉川大学の菊池重雄先生って方がいらっしゃって、オーナー学長も熱心で。いつからか知らないけど、コア・FYE教育センターとかいう組織も立ち上げて、今、山田先生がおっしゃったように、わりと大学として熱心な動きとしてあった、でも、使っていた言葉は一年次教育という言葉でした。

山田

思い出しました。小原芳明学長がInternational First-Year Experienceのサポーターになつてしまつたから、ゲストでいつも呼ばれてらつしゃいましたよね。アメリカの初年次教育に関する学会は、国内用と国際用があるんですけども、Internationalは玉川大学がホストされていたと思います。だから組織だってサポートしてたのが玉川大学だったと思います。

山本

なるほど。日本では、初年次教育と後から呼ばれる教育に取り組まれてた方がたくさんいらっしゃる。そういう豊かな土壌があったからこそ、学会がスッと設立されたというような、そんな感じなのかなというのが見えてきました。菊地先生はその頃どんなことをおやりになってたんですか？

菊地

私、学会の立ち上げには全く関わっておらず、ちょっと場違いなところに今日はお邪魔してるなという感じがするんですが、私の勤務校ではですね、やはり2000年代に入って、授業が成り立たないということが多い学内で起きていて、私など最たるものでした。

そこで『知のステップ』を私たちも買いました、1年生向けの基礎研究という授業でやったりしました。しかしアカデミックスキル系の話っていうのはモチベーションがあれば学生たちはきっと学ぶんだと思うんですけども、モチベーションがそもそもない学生にノートの取り方、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方、ディスカッションの進め方等々を教えようと思っても、その前に寝てしまうことが起きました。もう本当に暗黒の教室というそういうところでオロオロしていたというのが学会立ち上げ前夜の私の状況です。

初年次教育学会との関わりは、学会設立の2008年なんです。その時私は学会設立には関係なかったんですけども、2008年にちょうど学長補佐っていうのをやれって言われてですね、まずは学習意欲を高める初年次教育を検討せよというふうに言われました。って言われても何をすればよいか全くわからなかったんですね。

それでただ一つ思い当たることがあったんです。私は2006年から学科の科目でフィールドワークって授業を担当して、学生と一緒に東アフリカのザンジバル、フレディ・マーキュリーが生まれた島にですね、行くようになったんですね。そこで学生たちは、教室の中で見せる表情とは全く違うということに気づいたんです。ザンジバルというのは、誰からも挨拶されず誰からも話しかけられず50メートル歩くのが困難っていうくらいですね、すごいおしゃべりの島なんですね。そのお話をとっても学生たちは面白くて、延々と話をしていたんですね。どうもいろんなバックグラウンドが違う人との出会いってかなり面白いし、学生たちもすごく生き生きとしてるというのがあったんです。

そこで2008年に、当時七つの学部が明星大学にあります、その学部学科の学生をバラバラにして、いろんな学部学科の学生が会って語り合うような授業をやったらどうかなーっていうふうにその時思って、学長とかいろんな学部の教授会に提案してみたんですね。だからザンジバル式初年次教育って私その時呼んでいたんですけども。でも学内では学部を混ぜるなんてとんでもないと、散々言われて。

これは勉強しなければいけないということで、2009年に初年次教育学会に入会させていただきまして、山田 礼子先生にFD研修会に来ていただいて、初年次教育の全容を理解しようとしました。そして同じく2009年には安永先生にも明星大学までおいでいただ



菊地 滋夫 (明星大学)

いて、協同学習の考え方、理念、哲学、具体的な方法に至るまでご指導いただきました。初年次教育学会も私一人で入ったんじゃなく、10人ぐらいで初年次教育学会に押しかけて、ありとあらゆるワークショップやラウンドテーブルにお邪魔してですね、かなりご迷惑をおかけしたんじゃないかなと思うんですけど、勉強させていただきました。私と同姓同名で大変有名な方の菊池 重雄先生、玉川大学の取り組みからもいろいろ学ばせていただきましたし、金沢工業大学のEポートフォリオの先進的な取り組みもいろいろ情報を集めさせていただきました。こんなふうに教職協働でみんなで学べるすごく面白い学会っていうふうに思ってですね、面白がって参加させていただきました。

ただ一つだけ付け加えさせていただきたいのは、教職協働っていうのは間違いないと思うんですけど、そういう学会だったし今でもそうだと思うんですが、実はそこに学生たちの声が密かにこだましているということはちょっと言っておきたいなっていうふうに思っておりました。というのは、やっぱりザンジバルが原点で、ザンジバルに行った学生たちが、どうして日本人っていうのは心の壁を作っちゃうんだろうってことをしきりに言うんですね。もっとザンジバルみたいにどんどんいろんな人と話ができる、そんな場が明星大学にもあればいいのにっていうことを学生たちがしきりに言ってたんですね。その言葉に背中を押されて学部学科横断で語り合う授業を作っていく。そうするといろんなモチベーションがあつていろんな思いを抱えて大学に入ってきた学生同士が語り合う、その中でじゃあ自分はどうするんだと。どうやってこの大学で学んで卒業後は何を目指していくのかとか、いろんなことを考え始める。首都圏の大学はもうその時70%近くの進学率になっていたと思いますので、義務教育に近い感じでなんとなく大学来ちゃったっていう学生はかなりいたわけですね。そんな学生たち、入ってきてしまったんだけれども、何をここでやるのかっていうのは一人ひとりが考えていくしかない、そのためにはいろんなバックグラウンドの違う人と出会って話すしかないっていう、そういうふうにまあ考えてですね、そんな授業やりました。

私は学会立ち上げに主体的に関わったのではなくて、途方に暮れて困っていた人間ですね。でも、学生たちの声、そして初年次教育学会に参加されている多くの先生方や職員の皆さんに色々教えられて、なんとかこう手探りで初年次教育を作っていましたっていう、そういう状況でした。

山本

加藤先生は、この頃に初年次教育を受けられた方ですか？

加藤

はいそうですね。先生方のお話を聞きながら記憶を遡ってたんですけども、私は2007年度の学部入学なので、ちょうど多分初年次教育的な科目がおそらく大学に浸透しつつあるぐらいの時期だと思うんですけど、ちょっと記憶を遡ってもそれっぽい科目をとって授業を受けてたかなっていうとちょっと自信がないんですよねっていうタイミングで。具体的に言うとレポートの書き方とかノートの取り方的なのをきちんと教わったかっていうと、おそらくあまりちゃんと



加藤 みずき (多摩大学)

んとはやっていなくって。心理学専攻だったので実験のレポートまとめなさいとか、エクセルでデータまとめなさいみたいなのは課題としては出てましたけど、その細かいやり方とか、一番いい形、いいレポートってこうだよっていうのを教わったかなっていうと、あんまりそういうのはなかったからというところですね。ただ当時の先生方がもしかしたら色々心を碎いて授業カリキュラムをお考えになってたのかもしれないと思うと、ちょっと今申し訳ない気持ちになってます。

山本

初年次教育は、むしろその後に研究テーマとして関わるようになってこられたっていうことなんでしょうか？

加藤

そうですね。なので、改めて初年次教育っていうものを認識したのは大学院生になってから、それも博士後期課程に上がってから心理学メインでやりつつも、将来的なところを考えると初年次教育っていう分野もきちんと対応できるようになっておいた方がいいよって、師匠の藤田先生に。

藤田

そのところは、僕は戦略的に考えています。博士後期課程に進んで将来大学教員を目指す人は、これからは初年次教育についてちゃんと知っていますというだけでも、就職において一つの切り札としてのカードを切れるかなと思っています。そこで意図的に、僕の法政大学での初年次教育の授業に加藤さんには参加してもらって、授業の補佐をやってもらったりして、実際に僕の授業も見てもらうことで初年次教育について知ってもらおうと考えていました。そうすることで、就職した後に右往左往するがないようにという意図でした。

「初年次教育」という言葉の定着と広がり

藤田

学会前夜で、聞いておきたいと思うことがいくつかあります。学会設立当時は、“First-Year Experience”の日本語訳が、「導入教育」、「一年次教育」、「初年次教育」と併存していて、統一されてなかつたのですよね。山田 礼子先生の著書を僕が最初に読んだときは、「導入教育」という呼び方で書かれてて、それに従って僕もしばらくは「導入教育」という表現で論文を書いたり本を書いたりしてたのです。誰が「初年次教育」という言葉を定着させたかのかというのは、おそらくこの学会の名称とも関わるので、名称が定着した件について裏話的なことをご存じでしたら、ぜひ伺いたいです。

山田

これは私が答えられると思います。私も導入教育っていう言葉を使ってましたし、玉川大学と一緒に、私の著書も「一年次(導入)教育」になっているかと思うんですね。だから私自身は一年次教育って言ってたんですよ。で、なぜ「初年次教育」になったかっていうのは、今でもはっきり覚えているんですけども、当時、特色 GP っていうのがあったときに、私も審査員のメンバーでした。そのときの GP の座長が北海道大学の元総長の工学部ご出身の丹保 憲仁先生で、その先生のときに多くの「初年次教育」とか「一年次教育」っていう申請書が来たんですよね。そこで話題になったんです。これは「一年次教育」なのか

「初年次教育」なのか「導入教育」なのかっていう。そしたら座長が一言「それは皆さん、『初年次』でしょうねー」っておっしゃって、「初年次教育」はそこから定着したと思います。鶴の一声ですね。

山本

それがどのように広まっていったんですか？

山田

やっぱり文科省が初年次教育っていうジャンルにしたっていうのも大きいのではないでしょか。

藤田

僕の認識では中教審の答申「学士課程教育の構築に向けて」の中で「初年次教育」という表記が正式なものとして表に出た最初かなと思っています。その答申に用語解説が取りまとめられていて。だからその答申を策定する過程でどなたかが、今後はもう「初年次教育」という呼称でいくのだって意思決定したのかなと思っていたのですが、その辺は関わっていらっしゃらないんですか、山田先生？

山田

その時はもうすでに「初年次教育」って名前が定着していたと思います。

藤田

年代的にはまだ複数の用語が錯綜していて、カッコ書きで「導入教育」とか「一年次教育」が併記されていたんだけど、あの答申で「初年次教育」という言葉が単独で使われていて、カッコ書きがなくなっているのを初めて見た覚えがあります。

それで今日の座談会の冒頭で、山田先生がアメリカでは初年次教育が衰退したけれど日本では広まるとおっしゃっていた背景には、やはり学士課程教育の中に初年次教育というものが明確に位置づけられているのに対応して、認証評価で問われるようになったということがあるのではないかと思います。誰がこの学士課程教育の中で初年次教育を重視されて、やらなきゃダメだってことを強く主張されたのでしょうか。濱名先生でしょうか？

山田

中教審の学士課程教育答申のとき、川嶋先生も私も、濱名先生もみんないましたから、そこでお話をしたと思います。文科省の方々も学士課程教育の中の初年次教育というように認識されて、その後高大接続部会に継承されていきました。今の事務次官の義本さんが課題研究に来てくださった時もありますけれども、あの時もしっかりと初年次教育を、とご説明されていたのも関係しているのではないでしょうか。そういう意味では、政策的な動向と一緒にになって、いろんな大学からの方々が初年次教育学会に来るとヒントが得られるとかそういうことになったのではないでしょうか。

藤田

僕もそうでしたし、菊地先生もおっしゃってたように、現場で必要性に駆られてこういった教育プログラムをやろうって始めた流れもあるでしょうけれども、外圧に対応しなきゃといって始めたという大学も実際あったと思うんですよね。

菊地

2008年の学士課程答申は初年次教育を作るうえで外圧としてうまく使ったというかですね。学内でも何それっていう人もいっぱいいた時代ですから。その中で浸透させていく

ためには、やっぱり葵の紋所じゃないんですけど、答申にもこういうふうに書かれてるからっていうのを根拠としてやってたっていうところはありますね。

藤本

時代の流れといいますか、そういう要請が各大学にあって、各大学さんはいろんなことをおやりになっていたのですけれども、隣の大学は何やってるのかよくわからないし、効果がどうなのかも分からぬ。そういうお気持ちを持っている大学の先生が非常に多くて、教育の情報交換も今の時代よりもなかつたものですから、やはり他大学の活動を知りたいというのは結構あったのではないかと思います。当時はよく他大学に視察に行ってましたでしょ。金沢工大にもたくさんの大学さんが来て、私もものすごい数の大学さんをお相手しました。先ほどの菊池先生のお話じゃないですけれども、よそ様の教育内容を知りたい、見たい、という気持ちがもともとあったんじゃないでしょうかね。その時にタイミングよく、この学会が設立されたという気がいたします。私も金沢工業大学がやってることが、他の大学さんと比べてどうなのだろうか、というようなことを考えるきっかけになったのが、先に申しましたように山田先生、濱名先生とお目にかかるて、文部科学省での会議であったと思うし、本学会ができて非常に良かったと考えています。

菊地

藤本先生の話を伺っててちょっと思ったことがあるんですけど、日本の大学の歴史でこれほど大学間でお互いに学び合う情報交換をするっていうことが起きたことは歴史上なかったんじゃないかなと思うくらい画期的だったと思います。工学部とか医学部とか組織で教育をするような学部学科もあるかもしれませんけど、人文社会科学系だと、もう他の授業なんか誰が何をやっているかなんて知ったこっちゃないっていう世界だと思うんですけど、この大学の枠を一気に超えて一気に学び合いが、しかも教職協働っていうのがお題目じゃなくて、リアルにですね。もう教員だけではできないということで、職員も含めて、そして学生の力も借りながらみんなで学び合ったっていうのは、大変画期的というか、歴史的に見てもこんなことはなかったんじゃないかなと思います。今、ダルビッシュとかメジャーリーグで活躍してるような選手、一流の選手たちがいろんなボールの握りとか一切隠さないで、全部 YouTube で公開して学び合ってっていうようなことがありますし、青山学院大学の駅伝の原監督も同じように、それまでは秘伝のタレみたいにして隠しておいたようなものも全部オープンにして、そしてお互いみんなが学び合ってレベルを上げていって、お互い成長していくっていうそういう流れがスポーツの世界でこの数年すごく注目されていると思うんですけど、大学では初年次教育を一つの核として、そういうことが今から十数年前にバ一っと起きたんじゃないかなっていうふうに思います。

藤本

私は今でも覚えているのですが、同志社でしたか、学会設立の場で、「初年次教育という教育体系といいますか教育手法が、近い将来か遠い将来になるか分からぬけれども、なくなればよい」という発言をしました。要するに以前のような大学教育に戻れるようになればいいな、という発言をしたと思います。ただ予想が外れまして、もう今ではこれやらなければ大変なことになる、と思っています。

当時、私は、学生部長と修学基礎教育課程主任を兼務していました。教育学的な考え方とか理論を持ち合わせてない私が初年次教育の原型を設計したのですが、それを一緒につ

くった仲間たちは、実は職員で金沢工業大学卒業生が多かったです。要するに金沢工大の教育を受けた方々ですね。その経験を生かしながら、この科目に不足している部分を補ってくれました。それを他大学さんに見てもらい、評価していただくという気持ちもあったのですが、大学教育全体の中から初年次教育がいざれば発展的に解消していくことが望ましい、という気持ちはありました。初年次教育そのものというだけじゃなくて、初年次から2年次へ、2年次から3年次へという、継続的なプログラム、1年生の学修の成果あるいは評価が、4年間をほとんど決定する、というようなことを考えていたのだろうと思います。のちの「進化する初年次教育」について、教育改革を進めるなかでボンヤリと考えていたような気がしています。

山本

川島先生はいかがでしたか。

川島

はい。まあやっぱり当時大学教育改革をしなきゃいけないっていう雰囲気がふつふつと周りにあって、そこで考えられている枠組みっていうのは教養教育をどうするかとか、教養教育から専門へとつなぐっていう従来的な枠組みの中で、大学という今までと違う教育的時空間の中に入ってくる学生に対してそれなりのケアが必要なんだっていう発想はやっぱりすごく新鮮だったし、それにはそれなりのコンテンツと方法論が体系立って伴わなきゃいけないとというので、そういうプログラムが必要なんだっていうのには非常に共感できたっていうことです。それを推進していくのに自分も力になれたらなっていうことだろうっていうふうに思います。転換教育とかいうそういう言葉を使ってた人もいたように思いますが、言葉の使い方はどうであれ、波みたいなものがあって、そこでさっきからお話しが出るよう、いろんな専門の人たちにどういうふうに伝えていくのかっていうときに、やっぱり新しい概念が必要だったっていう。概念とその価値ですね、バリューがやっぱり必要だったということだろうというふうに思います。

山本

西村先生はいかがですか？

西村

僕自身の背景は教育学で、動機づけの研究で科研費を2回採択されています。2002年に金沢工大に赴任したのですがやはり学生の自発的学習に向けた動機づけが不十分で、特にそれが1年生で顕著でした。学びのスイッチが入ったら、割と伸びる子がかなりいるのでもったいないんだけどなあと感じていた時に、ちょうどこの学会の設立と重なったもんですから、非常に感銘を受けました。

川島

ちょっと少し話が変わるんですけども、この学会ですごく変わったことは、大学教員以外の大学教職員以外のアクターですね、具体的には民間とかそういう人たちが教育の中に参入するきっかけを作ったというか、良きにつけ悪しきにつけてですかね、その面はすごくこの学会発足の影響



西村 秀雄(金沢工業大学)

はあったんじゃないのかなっていう。まあ贊助会員というシステムを作って、最初は費用を捻出するためということだけだったんだけども、企業もいろいろ中身について関わってこようとして、教科書なんかも作ってますし、それから僕は新聞社の人に言われたんだけど、こういう教育だったら自分たちもなんかコンテンツ作って貢献できるんじゃないかなっていうふうな相談を受けたこともあるんですけども。だからそれはある意味でこのちょっと変な言い方ですけど、これはいろんな評価があり得るというふうに思うんですけども、今すごくいろんな面で民間の参入っていうのは、結構民間の方のレベルも上げてきてるじゃないですか、そういうものの走りだったんじゃないのかなっていう気はしますので、それはちょっと一言添えさせていただきたいというふうに思います。はい以上です。

安永

まさにそのことは、私も当初から気になっていたことです。業者もいろいろですが、業者に大学の教育を任せることと一体どういうことなんだろうか、ということです。確かに業者のレベルは上がってきてる。それは認めます。「でも」っていうところはどうしてもあって、この業者との付き合い方については、この学会に参加してずっと考え続けていることです。確かに研究が全てとは思っていません、もちろん。学生の皆さんとか職員の皆さんとかですね、研究とは違った方たちがどんどん入ってきて大きくなるということは当たり前のことなんです。そこに業者が含まれることを決して拒否するものではありません。しかし、大学教育の一部とはいえ、業者に丸投げしているかのような印象を受ける実践を見るに付け、疑問を感じことがあります。大学における教育は研究に裏打ちされた大学教員が主体となるべきと考えています。それを業者が担えるのかという疑問があります。

いやいやそれはちょっと古い考え方じゃないか、って思われるかもしれません。私もそういうふうな感覚もなくはないんですが、それに変わるものを見つけていない、っていうこともあります。いま、業者に全て任せてしまうと大学教育自体が崩壊するのではないかと私は思っています。もっと言うと、大学教員の存在自体がもう一度問い合わせ直されないといけないところまで来てると思います。もちろん、そこも避けて通るべきじゃないと思っていますが、ぜひこの議論は続けていってほしいと思います。それがもしもしたら大学教育の今後のあり方を変えていくモーメントとなるんじゃなかろうかと思っています。川島先生、ご指摘ありがとうございます。

学会立ち上げ後の歩み

山本

学会が設立された後の話に移ります。会長・事務局長をご経験された先生方に、任期中の出来事で印象的だったこととか、こういう課題に取り組まれたとか、ご自身の任期中の初年度教育の変化及び初年次教育学会の変遷といったものをお伺いできればと思います。初代会長の山田先生からお願いできますか？

山田

わかりました。多分初期の頃と今とは随分状況が違うので、抱えている課題とか直面している課題は随分違うと思います。私のときというのは、川島先生が非常に支えてくださった第1期、それから第2期以降は藤本先生や西村先生にも本当に世話をなったと感謝しています。まず、初年次教育学会を立ち上げた当時というのは、ある意味日本の高度

成長期みたいなところがありまして、初年次教育に多くの大学の関係者が目を向けたという背景もありましたし、学会を通じていろんなノウハウとか動向を知りたい人たちが次から次に、西村先生が幹事としていつも会員の動向を把握していらっしゃったのでご存知かと思いますけれども、会員が増えていく時代だったと思います。ですから、例えば学会を開催した時に、会員に方法論であるとか研究方法をどのように広げていくかということで、理事の先生方が随分ご尽力されたと思います。いわゆるワークショップ型の今でも行っているような形が普及していった時期でもありました。学会が上り調子にあった時代でもありましたから、とにかく普及をさせていくことが大事であると私は考えておりました。

一方で、5年目の学会の編集による記念本、あれは藤本先生などのご尽力によりまして、会員にフリーで配付したと思いますが、ああいう形で残したことは大きな意味があったと思います。また、年次大会を引き受けてくださる大学も、当時はやはり初年次教育を広げていこうという気持ちが皆さんこう高まっていた時期がありましたから、あまり探すのに苦労しなかったように記憶しています。

その後、時代が流れていく中で、藤本先生がずっと編集委員長でご苦労されてきたことでございますけれども、やはり大学院生がいませんから、研究論文という形で投稿する数は少ないわけです。このあたりが今も抱えている課題かなと思っていて、当初から藤本先生がいろんなところでワークショップ型で論文の書き方を担当してくださっていますが、研究論文の投稿論文数に反映されないところが課題の一つですね。後継者につながっていくことは大事なので、若い人たちにどうつなげていくかっていうことは初期の頃からの大きな課題でありましたけれども、それについては現在も同じように続いているのかなと思っています。ただその間、新しい動向として、教育実践賞などもできてきましたので、そういう形で広がっていき、励みになっていけばいいなと思っておりますけども、このあたりはあとで皆さんと一緒にご議論などできればと思っています。以上です。

山本

途中から事務局長をされていた藤本先生、その時代で印象的なこととか記憶に強く残つてのことっておありますか？

藤本

学会発足当初はですね、川島先生が事務局長で、お一人でいろんなことをされていて大変だったと思います。お金の振り込みから何からすべてやられていました。それを金沢工大で受けたのですけれども、金沢工大ではご承知のように西村先生と幹事であった柄内先生と私で3人が中心になっていましたが、みなさんが協力的でうまくいったのだろうとは思っています。ただその頃は手弁当でやってました。というのも、実は学会の財政がどうなるかということが、私の第一の心配でして、なるべく節約節約で進めました。そのときに学会の原資みたいなものがある程度できましたので、500万円を緊急時の予備費・特別会計とすることができました。



山田 礼子・藤本 元啓

しばらく経って、財政が安定てきて事務局をどうするかという議論の過程の中で、法人化しようかという話が濱名先生から何回かありました。法人化は、手続きのことは除きまして、個人会員が約500名の規模でしたので、とても難しいだろうと思いました。西村先生もお入りかと思いますが、日本工学教育協会のように5,000名とか6,000名の会員というのであれば別なのでしょうけれども、ちょっとそれはという気持ちでずっとおりました。

ただ事務局をずっと金沢工大に置くわけにも参りませんので、どこか代行するところはないかと考え、いろいろな経緯の末に国際文献社の方にお願いできる話を聞いたので、話を進めた次第です。確か、西村先生、そういう経緯だったと思いますが、どうでしょうか？

西村

学会事務局については最初、川島 啓二先生がすべて担当してらっしゃいました。しかしこれは最初だけの暫定的なものでしたので、あるとき、山田会長から「金沢工大しかありません」と、次の事務局を依頼されました。正直なところ、当時は他に引き受け手がなかったというのが実際の状況です。事務局が金沢工大に移ってからは経費削減のため、事務はすべて手弁当でこなしていました。しかし事務局の体制がこのままだと金沢工大の次の受け皿がないので、少なくとも事務的な作業については外部委託することになりました。

いろいろな経緯を経て受け入れ先を探した結果、国際文献社しかないということになりました。国際文献社は既にいくつか学会事務局を引き受けており、2014年4月1日付で契約して事務を委託するということになりました。これで少なくとも学会事務局が交代できるという体制が作られました。

藤本

その通りです。とにかくそのような経緯でした。ちょっと心配していましたのは、国際文献社にお願いをしてからの経費が年間どれくらい発生するのかと、それに対する収入はどうだろうか、ということを私自身は心配していたのです。柄内先生が試算して、収支を勘案していただいたら、どうやら収入と支出がトントンぐらいの状況になっているということでした。ですから会員数が激減しない限り、あるいは未納が多くならない限りは、この体制でいけるのではないかという見通しが立ちました。そこで、運営的には、事務局の分室として国際文献社に参画していただくことで、軌道に乗ったのかな、という気がしております。

ですから、最初は資金面の問題、それから事務局を今後移動していくという問題がありました。基本的には解決して行く方向にあった時期かな、というふうには思っています。私の方はそこが一番苦労したことですかね。

山本

先生方が学会の体制を整えていかれることにご苦労されたとよくわかりました。そのあと続いて安永先生が会長になられて。安永先生の頃はいかがだったでしょうか？

安永

はい。今、学会誌をざっと並べて見ていくんですけども、2014年の第6巻のところで私の挨拶が巻頭言としてあるようですね。従ってその前年の2013年から4年間ということになると思います。山田先生の時に皆さんがあさまざまにご苦労されて学会を軌道に乗せていただいた後にご指名頂いたということですね。一番大きな思い出っていうのは、山田

先生と藤本先生に「拉致」されましてですね(笑), タクシーの中で会長をやれと言われたのは、何がどうなってのかさっぱりわからなかったのですが。その時、私は何を考えたかよく覚えていませんが、お引き受けすることになりました。その後の4年間、学会の運営をさせていただくことになりました。けれども、これはですね、1から10まで、先ほどありました金沢工業大学の先生方、理事の先生方、皆さんに支えていただいたので、会長という大役をどうにか大過なくやれたという強い思いがあります。

当時、私が考えていたこと、やったことと言いますと、今でいう地域活動活性化委員会でしょうか、これを立ち上げたことです。年に1回の全国大会はそれで構わないんですけども、この初年次教育の動き、活動というものを全国レベルにする、それからもっともつと各地域に根ざした活動にしたい。全国各地の大学ではさまざまな取り組みが始まっています。それらを掘り起こし、ネットワーク化する。そういう思いがあつて提案させていただきました。残念ながら、現時点では期待したほどの成果はあがっていません。取り組み自体は間違っていないと思いますので、今後、皆さんにもお知恵をお借りしながら、新たな展開を模索する必要があるかと思っています。

それから思い出としてはですね、2015年の第7回大会が忘れられません。当時、理事であった岩井 洋先生に大会実行委員長をやっていただいた時の大会企画シンポジウムのタイトルが「表現から実現へ」でした。初年次教育における自己表現ということをテーマでやられたんです。私は、この企画に實に大きな影響を受けました。芸術や演劇などを教育にもっと積極的に取り入れるべきと考えるようになりました。

このように考えた背景に何があったかというと、日本リメディアル教育学会の存在がありました。日本リメディアル教育学会は理系的なところが非常に強いんですね。コンピューターとかですね。では、同じような志向性をもつ初年次教育学会は何を「ウリ」にすべきかと常々考えていました。日本リメディアル教育学会とはちょっと違った路線を育てていくべきだと考えていました。そのヒントを第7回大会で得たわけです。それで第8回大会より、毎年、知り合いの先生方をお誘いして、芸術関係、最近は演劇を中心になっていますが、関連するワークショップを続けています。そのうち、芸術教育や演劇教育は初年次教育学会と言われるようになればと思っています。

それからこれも第8回大会になりますか、初等中等教育の学びと大学初年次教育との連携ということで高大接続を意識するようになりました。高大接続に関しては、初年次教育は本当に面白い立場にあると思っています。小中高と大学・社会を結ぶちょうど真ん中にある蝶番のように思えます。大学教育に対しては、もちろんいろいろと意見を述べることもできるし、初等中等教育に対してもいろいろと提言できます。この点も非常に大きな「ウリ」にしていきたいと思ってます。

山本

藤田先生が途中から事務局長になられて、安永先生と共に学会を支えてこられたんですが、その頃藤田先生からご覧になって、何か印象的だったことはありますでしょうか？

藤田

僕は2015年度から2018年度の終わりまで事務局長を務めていたのですが、藤本先生や安永先生からの強いご指名があって引き受けたという経緯を覚えています。なにしろ金沢工大では優秀な方が複数で事務局を回していたという印象が強かったので。僕のところで

引き受けたら、基本的には個人になってしまうというのが一番の懸念事項ではありました。金沢工大が事務局の間に国際文献社に外部業務委託する体制を整えてくださっていたので、ある程度の部分は業務を軽減できいても、引き継ぐのには少々不安を感じていたというところからのスタートになります。

大きな流れで言いますと、先ほど藤本先生がおっしゃっていた通り、次の引き継ぎのことも考えて、自分が事務局を担当している間にいかに合理化できるかということを考えていきました。さらに次の方にバトンタッチしやすい環境を作ろうと思っていまして、国際文献社との連携はもちろん継続していったんですが、大きなところでは年次大会の運営について整理をしました。国際文献社に大会の業務委託をするというところを、大きな仕事としてやったかなとは思っています。大会を引き受けてくださる大学を探すというのが毎年頭を悩ませる案件ではありましたし、頼むにしても膨大な人的リソースがないとできないような状況だと打診すること自体が難しいので、国際文献社に業務委託で済むところと、大会校独自のアイディア・企画を活かせる部分を切り分けようということを考えました。

さらに、事務局と大会運営の体制も切り離すべきと感じて、大会運営委員会というものを立ち上げました。僕が事務局を担当していて思ったことは、大会の多くの業務を国際文献社ヘルプデスクに委託していくながらも、大会校がやるべきことが毎年ゼロからのスタートになってしまっているということでした。毎年、ほとんど前年度からの引き継ぎが体系的にされていない状態で、事務局長が年度をまたいで大会校の橋渡しをするのですが、一つひとつの大変連の作業についてすべて事務局長が確認しながらアドバイスをしていくというのを毎年やらなくてはならない、正直に言ってとても大変な状態でした。そこで、理事会の中に大会運営委員会という組織を専門的に作って、継続的に大会校側をサポートする体制を作ろうと考えました。引き継ぎ的な意味では、大会運営委員会の委員長を誰がやるのかを考えたとき、手を挙げることのできる人はいないだろうと思っていたので、僕が事務局長の任期が終わったらそのままスライドして大会運営を引き受けることにしました。事務局長のときから大会運営委員長まで通算して、大会に関して6年間運営に関わってから、会長就任という流れになっています。

その他にも、事務局の立場から見て、きちんとルールができるところが多々ありました。例えば台風などの自然災害時にどういうフローで中止や延期とかを意思決定し、参加予定者に周知するかという定めもなかったのです。四国大学に大会を引き受けていたとき、お引き受けいただいた当初から「9月は台風シーズンなのでとても不確定要素多いですよ」と先方から言われていて、大会直前の1週間前予報で台風が来ることがわかつてから対応を始めたのでは遅いなと思いました、自然災害が当日起きたときにどうするかということを2016年にきちんとガイドラインを定めて、これは現在でも生きています。結局、四国大学の開催時には幸いにも台風は来なかつたのでガイドラインを使うことはなくて、それはそれでよかったのですが、2年後の北海道の酪農学園大学のときには「ガイドラインを作つておいてよかった」と思う事態になりました。

ご存知の通り、2018年度の第11回大会は台風が直撃して、初日の午前中のプログラムは中止になりました。ただそのときはガイドラインが確立されていたので、事務局長としてはそれに沿つて情報発信すればよかったので、比較的スムーズに、混乱を最小限に食い止められたと思っていました。初日の午前はやむを得ず中止になつたけれど午後からは開

催できましたし、2日目のプログラムは、まるまる予定通りにできると思っていたら、2日目の未明に大地震が来まして、結局2日目もすべて中止になってしまいました。2018年度の酪農学園大学での第11回大会は結局4分の1のプログラムしかできなかつたっていうのが一番心残りです。そのとき大会の準備をがんばってくださっていた酪農学園大学の先生方に対しては、申し訳ないと思いつつも、もう1回大会をやっていただきたいとお願いするのは失礼なのか、それともお願ひしない方が失礼なのかと、ずっと迷ってはいるんですよね。

藤本

酪農学園大学の学長さんがなにかのご用で熊本に来られたことがありまして、お会いしました。酪農学園の教育改革のことがお話のメインでした。その際に学会の大会が流れることについてお話しし、「大会を再度開催すると非常に大きな負担がかかるので、シンポジウムでもやりましょうか」とちょっとお話しました。「そうですね、やりましょうか」というお返事だったのですが、その後このお話は進んでいません。1日のシンポジウムであればこちらが準備しておいて、会場をお借りするというような形になりますので、それはやってもいいのかな、とは今でも実は思っているところです。

藤田

そうであれば、地域活動活性化委員会の「地域」というのは、別に九州とか北陸に固定されているものではありませんから、北海道で開催するということを考えられますね。コロナが落ち着いたら北海道で本学会として何かイベントを開催して、みんなで大挙して応援に行くというのも、一つの節目として視野に入れていていいかなと思いました。

少し本筋から外れてしましましたが、話を戻します。事務局長時代、規程類の整備を意識していたということと、次の方に引き継ぐにあたって仕事はなるべく減らしておこうと思いました。事務局業務を合理化することが結局のところ、この学会運営の持続性に大きく貢献するだろうという見通しを持っていました。財政的な面でいっても、今のところは毎年の単年度で考えたら収支は釣り合ってる状態です。特に余剰金を切り崩しているわけではないですから、コロナ禍の中でいろいろ不確定要素はありますけども、学会運営を持続可能な状態に持っていくかなと思っています。僕が事務局を預かっていた期間は、大まかに言うとそういうベクトルでやってきたと思います。

山本

2018年は藤本先生が会長になられたときで、最初の大会が酪農学園大学のときでしたね。

藤本

4年間会長をさせていただいたのですが、一番印象にあるのは第1回教育実践賞を酪農学園大学でやったことですよね。ただ本当に残念なことに、ポスターのセッションが台風で流れてしまい、ポスターを見ていただくだけになってしまいました。2日間の大会の日程の中で共通の時間が取れれば一番いいのでしょうかけれども。九州大学でやっていたQリンクスでは1時間半ぐらい時間をとって、ポスター発表者が3分から5分ぐらいの間で、一気に説明をして、あとはポスターのところで詳しく聞いてください、というようなことをやっていましたので、時間的な余裕があればというような気がしてます。現在、大会開催期間は2日間ですので、時間の制約上の問題があるのかもしれませんけれども、教育実践賞が実際に行われたということが印象的でした。

それから二つ目は、先ほど藤田先生がおっしゃったように、酪農学園大学の台風と地震のこと、それから沖縄国際大学での開催が新型コロナで延期になったことで、4年間の四つの大会のうち二つが中止に近いことになったということが、残念と思っております。

そういうことがありましたけれども、もう一つは理事の先生方、私を含めまして発足のときからあまり大きな変動はなく、だんだんと高齢化してまいりました。いろんな委員会のメンバーも理事の方です。学会誌の編集委員会だけは、理事以外の会員の方も参加されていましたので、他の委員会も後継者を育てると言いますか、次の世代の方々にいずれバトンタッチしなければならないわけですので、若返りを図るという意味でも、必要に応じて委員のメンバーに加えてください、というお願いをしたことです。

それから現在、学会では、年次大会が1回、そのほかには地域活動活性化委員会で年に数回、現在ではほとんど金沢と久留米に固定していますし、久留米大学で安永先生が他の研究会との合同、後援というか共催というか、そういう形でやっております。ただ以前は、各大学から開催希望の手が挙がったこともあったのです。当初はそういう声がたくさんあったのですが、だんだんとなくなってしまって、今は何と言いますか、地区の支部会と言いますかね、そういう形になってしまったな、という気もしますから、原点に戻ることができないものかと考えています。

これとは別に確か研究課題の方で、あれは岩手での開催でしたが、シンポジウムを1回やられましたね。それは記憶しておるので、その他の開催はないように思います。ですから大会以外で会員への還元ということが必要と思ってはいたのですが、皆さんたち大変お忙しいものですから、企画、開催がなかなか難しいというようなこともあります。

大会運営委員会については、先ほど藤田先生がおっしゃった通りであって、藤田先生が新たに委員会を設けられて、うまくいくようになり、大変ありがたいと思っております。そういうことで私の方は、学会の運営の方に気が向いていたような感じで過ごした4年間です。

私の次に藤田先生が会長になられるわけですけども、先ほど先生ご自身でおっしゃったように、きめ細やかなご性格と行動力で、私が会長を4年間務めたときに、事務局長の藤田先生がいらっしゃったことで大変助かったという感謝を強く抱いているところです。以上です。

山本

藤田先生がその後を引き継がれて、現在に至るという形ですけれども、いかがでしょう。
藤田

僕の会長就任の前に、僕から菊地先生に事務局長のバトンタッチがありました。会長と事務局の間では自明のことなのですが、会長は1期が2年の任期で、2期4年が最長と決まっています。その4年間の前後2年ずつを事務局長の任期4年とうまくずらしてのりしろを作っています。会長と事務局が同時に交代してしまうとおそらく学会が回らなくなってしまうので、会長の2期目と事務局の1期目が重なるように、役員の改選の際に意図的にやっています。それで、僕の事務局長の任期が終わった後、どなたに事務局を引き受けいただけるかというのが本当に悩ましいことでした。法政大学で、僕だけでなく加藤さんに事務局幹事をやってもらっていて、2人というか1.5人分ぐらいで事務局を回せるように合理化はしていたのですが、それでも当時の理事の方々の顔ぶれをみるとお願いす

るのが難しいよねと、藤本先生と相談していました。まあ当時の理事会メンバーにこだわらなくても、初年次教育にだいぶ積極的で熱心に取り組んでいただけて、なおかつ人材も十分にお持ちの明星大学だったら前向きに検討してもらえるのではないかと藤本先生にご提案いただき、藤本先生から菊地先生にオファーしていただいたのでしたよね？

藤本

そうです。

藤田

事務局長だった僕から菊地先生に直接お願いするのではなくて、会長の藤本先生からお話しをいただいたおかげで、ご快諾いただけて、うまくつなげることができました。でも普通に考えたら無茶な話ですよ。理事でもなかった方に、いきなり事務局長をお願いするって。引き受けただけるのか実は半信半疑だったのですが、お引き受けいただけて本当に助かっています。その分、僕も事務局を丸投げするわけにもいきませんから、事務局幹事として2年間引き継ぎがてら残りました。あんまり僕がしゃしゃり出ると引き継ぎにならないので菊地先生をバックアップするという感じで、なんとか引き継いでいただけてどうもありがとうございました。なので年代的に言うと、僕の会長時代より先に菊地先生の事務局長からのお話かなと思います。

菊地

まず、やはり成果はですね、初年次教育って一体何？っていうところからわずか10年そこらの間に、これだけ豊かなバリエーションとともに全国の大学に広がった。初年次教育はこうやつたらいいっていう唯一の正解があるわけではもちろんなくて、それぞれの大学や学部学科に応じた実践があって、もちろん色々失敗もあってですね、そしてその上にまた新しいチャレンジがあって、そうやって積み重ねられて広がっていったっていうのはすごいなっていうふうにまず率直に思います。それを支えてこられたのが初年次教育学会の歴代の会長の先生方、そして理事の皆様のお力だったということを改めて感じています。

私はとにかく、本当に毎年大会を楽しみにしてまして、研究と実践というのは両輪なんですけれども、実は実践っていうのは研究ではないのかって言ったときに、必ずしもそうではないっていうふうに私は思っています。それは論文という形にはなってないのかもしれないんですけども、やはりそれぞれの知恵や工夫の積み重ねがあって、その中で失敗したりうまくいったりっていうことがあって、進んでいく非常に尊い営みだと思ってまして、その成果に触れられるっていうのは本当にありがたい場でした。そして、毎年様々なワークショップとかラウンドテーブルがあってですね、こんな豊かな学びはないなっていうふうにずっと思いながら参加してまいりました。

バトンタッチのとき、事務局をやってやれというふうに言われたときですね。ちょっと私、学内でややこしい仕事してたということもあってですね。副学長だったんですね。それでいろんな学内の委員会の委員長っていうのをやってまして、もう本当に大変だったんですけど、とにかくこれだけお世話になった学会で事務局の大変なお仕事をされてこられた先生方がいる中で、忙しいからやりませんって言えないじゃないですか。学会の理事会の歴史も全然わかってませんでしたので、いろいろご迷惑をおかけするとは思ったんですけども、これほどお世話になっている学会に、忙しいのでできませんっていうのはさすがに言えなくて、お引き受けしました、はい。それで今日に至るまでご迷惑ばかりをおかけ

してるんですけど、幸いですね、明星教育センターがあって、事務局のスタッフも大変優秀ですので、そして前任者の藤田先生はじめいろんな先生方のアドバイス、お叱りを受けながらなんとかやってるっていう状況です。

ただこの2年半余りの間、コロナですよね。ここはやはり大きいなと。この学会にとっても大きなターニングポイントではないかということですね。やはり大学教育のみならず日本、世界がコロナによって大きな影響を受けていて、そして、おぼろげながらその形っていうのは見えながらやってきてるんだけれども、実はこうやったら初年次教育が大丈夫だというところが見えてるわけでもないというところでですね、依然やはりその中で悪戦苦闘を続けているんだっていうことに気づかされますね。

この先に、初年次教育にとっての未来といったもの、これでもう将来はこうなるんだっていうふうにわかったように語れないっていうところに今我々はいるんじゃないかなっていうことを感じています。

初年次教育学会の成果とこれからの課題

山本

すでに菊池先生が初年次教育学会の15年間の成果についてお話されていましたが、改めて山田先生からまたお伺いしてもよろしいですか？

山田

そうですね、初年次教育のバリエーションはいっぱいあるとは思うんです。しかしそれでも新入生と言いますか初年次生ですよね、高校と大学という接続の観点から見て、大学の学習や生活に円滑に移行させていくということが、ほとんどの大学の中で認識されて位置づけられて、そしてそれに基づいて方法論も含めて、しっかりと初年次教育、First-Year Seminarとかそういう形でカリキュラムの中に位置づけられたということが大きいと思うんです。

これはもちろん2015年以降、三つのポリシーが義務化されたことによって、初年次教育はカリキュラムポリシーとかディプロマポリシーの中で重要な位置を占めるということを、ほとんどの大学が認識し、実際にそうなっていることが大きいと思います。ですからバリエーションはたくさんありますが、初年次教育の政策的な流れの中での一つの位置を確認できたこと、あるいは位置をきっちりと占めることができたことが大きいかなと思います。だからそれに向けて初年次教育学会も応えていかなければいけませんし、そういう意味でも実践プラス研究をしっかりと進めていくことが必要です。研究が活性化していくないと実践に反映されなくなっていくことがいつか来ると思うんですね。だからそこは、当初からの理事はみんな高齢化してきていることもありますから、やはり後継者にどれぐらいそこを認識していただいてつないでいくかということが大事かなと思います。

山本

山田先生のお話からは、初年次教育の正当性というものを担保してきたのがこの学会だったのかなという感じがいたします。安永先生は、初年次教育学会が果たしてきたインターフェイスとしての意義を強調されてこられましたけれども、それは安永先生から見て成果だとお考えですか？

安永

そうですね、基本的に大事なことだと思ってます。初年次教育は多様な活動を包含していますが、そのなかに教育のパラダイムシフトがあると思います。今までのピラミッド型をいかにフラット型に変えていくか。そのつなぎ目の役割が初年次教育にはあると思います。高校までの受動的な学びから、大学からの主体的な学びへの転換とも言えます。ここには大きな溝があります。そこを埋めるためにこの活動があると思います。先ほど藤本先生が「進化した初年次教育」という言葉を使われましたけども、まさにその通りだと思うんですが、私は「進化し続いている姿」というものを今からの学会は求めていくべきと思っています。

いま高校では「総合的な探究の時間」が実施されています。これは小学校3年生から実施されている「総合的な学習の時間」の延長線上にありますが、これを大学における探究活動といかにつないでいくか。まさに初年次教育がやるべき仕事だと思っています。高校では探究の授業をいかに創っていくか、これが大きな課題になっています。探究活動は大学でやってる卒業論文の指導そのものだと考えられますので、大学の先生方が持ってるノウハウ、それも初年次教育学会だったら、さまざまな専門性のなかで、こんな卒業論文を書いてきている、指導しているという情報を、学会として高校サイドに提示する。例えば「こういうテーマではこんな研究がありますよ。このような展開のさせ方がありますよ」といった情報を提供することから始めたらどうかと考えています。

それからですね、同じような志向性を持った他学会との連携は、やはりこれからも追求すべきだろうと思っています。先ほど出しました日本リメディアル教育学会とは、久留米大学で第4回大会をやった時に、ちょっとしたコラボをしたりですね、それからリメディアルの大会に私自身が出たりしながら人脈を作ってきました。そういう状況で、日本リメディアル教育学会と関連した様々な活動にも参加させていただきました。最近はコロナ禍の中でできませんでしたけども。そういうことを通して、日本リメディアル教育学会ばかりではなく、関連する他学会とも連携を深めていくことを考えたらどうかと思います。

それからもう一つ。学会設立当初から藤田先生と一緒に協同教育のこと、授業づくりについて力を入れてきました。この点に関しては、今後も、さまざまな工夫を取り入れながら展開し、初年次教育学会の一つの「ウリ」にできたらと思っています。

藤本先生が「初年次教育がなくなればいい」というような話をされました。実は先ほどのピラミッドからフラットへのパラダイムシフトということを考えていくと、徐々に無くなりつつあるんですよね。要するに高校までの受動的な学びを大学での主体的な学びに変えていくことが初年次教育のやるべきことです。このことを言い続けてきたのですが、高校サイドに随分と届いてきたと思っています。高校も大学も基本的に同じスタンスで教育をするようになってきていると思います。そうすると今まで大学の初年次で行っていたことが高校で行われるようになった場合に、大学での教育を担当している私たちの初年次教育はどうあるべきか、という新たな問い合わせが生まれてきます。

この問い合わせに対しても、こうあるべきという絶対的な姿はないはずなんです。時代に応じて、悪戦苦闘をしながら何かを創り上げているという姿をいかに発信し続けるかということが一番大きなポイントだと思います。何か一つの形にとどまって、それさえ伝えておけばいいんだという発想になると、いわゆる「形骸化」ということが起こってしまいます。

だから常に時代の変化を注視しながら、対象とする学生の特性、社会情勢、様々なものに合わせて、初年次教育の質を少しでも高める必要があります。それをベースとして、日本の教育全体に対して何を提言できるのかということ、この辺の議論を深めていく必要があると思います。

そこで期待するのが若い人達です。新しい人たちに入ってきてもらわないと戦闘ができません。次の人たちを信頼して任せること、学会として戦闘を続けていく大きな力になるんじゃないか、と個人的には考えています。

山本

高等教育のパラダイムシフトの中でのフロンティアとして初年次教育学会が役割を果たし続けていくために、初年次教育の領域を拡張していく。それは初等中等教育かもしれないし、学問分野においてもそうではないかというお話ですね。藤本先生はいかがですか？

藤本

この学会が発足して、世間的に初年次教育という名称が知れ渡るようになって、各大学さんも、これも前回申しましたけども、自分たちのやっていること、他大学でやってること、いろんな情報を知ることができるようになったことが大変良かったと思います。

現在、文科省の教育改革等の進捗状況の調査票が2年ぐらい遅れて公表されていますが、ほとんどの大学が初年次教育を行っている状況です。ただ教育の中身がどうなのかよくわかりません。補習教育みたいなものを、初年次教育と考えているような大学もまだあるだろうと私は思っています。

例えば、レポート作成の方法を学生に全く教えずに、先生方がレポートを書きなさいと言っても、学生が書けるわけがないですよね。コピー＆ペーストとか、根拠がなく、自分の思い込みや思いつきを書くだけになっている場合が多いのではないか。しかし、初年次教育を導入してレポート作成演習をやり出したことで、これはしっかりとやつておかなければいけない、と認識される先生方も数多く出てきました。

一方で、逆に初年次教育でしっかりとやってないから専門課程で学生たちが何もしないじゃないか、というご批判も受けるのですが、それは初年次教育でやってしまえば何もかもマスターできているというものではなく、学士課程を通じてやらなければならぬということを、まだ理解できない先生が非常に多いと思っています。

それは、先生方一人ひとりが、ご自分の専門領域の研究というところにどうしても主軸を置いている、だからそうなっているのだろうと思います。私の勤務先の場合は、いまだに基礎教育と専門教育の間にものすごく高い壁があって、専門は専門、基礎は基礎、完全に分離して考える先生もいらっしゃいますし、その数は決して少なくない印象を持っています。一方、逆に基礎教育と専門教育とを結びつけたい、今以上に接続させて学士課程教育をしっかりとやりたいという学科もいくつもあるわけです。そのような学科は初年次教育を非常に大切にしていたり、初年次教育に連続する、あるいは並行して行うような授業プログラムを作っていたりしている、そういう事例も出始めました。そういうことも、この学会の役割があったのだろうなと思います。

先ほど安永先生がおっしゃったように、探究の授業が高等学校で始まってまいります。これまで初年次教育でやっていたことのいくつかの部分、課題解決のような学修は、高等学校で行われてくるようになるのではなかろうかと。そうするとそういう生徒さんたちが

入学してくるわけですね。そのときに今までやっているような初年次教育はそのままでいいのか、ということは考えておかなければならぬと思います。そういう意味で、進化と、もう一つ深いという意味の深化ということをやはり考えなければなりません。山田先生がおっしゃったように、そのことを次の世代の方々、後継者の方々がしっかりとご理解いただいた上で、あるいはそういうようなテーマで何か一つシンポジウムとはいきませんけれども、例えば学会大会プログラムに特別なセッションをつくっていくのも、これから初年次教育学会の方向性を考える試金石になるかもしれないと思ってます。

藤田

僕が思うところは、だいぶもう皆さんが話されているのですが、まだ話に出てない要素としては、やっぱり学会って一つのコミュニティの役割を果たしているということでしょうか。例えば藤本先生が先ほどおっしゃったように、学内で孤軍奮闘されている、悪戦苦闘されている先生がいらっしゃったとしても、学内には仲間がないという可能性もあるわけです。理解者がいないために頑張りにくいという状況も生まれるでしょう。だけどこの学会に来たら問題意識を共有できる人がそれなりの数いて、情報交換会などで話すことによって勇気づけられるという、学会とはそういう場でもあると思うんですね。これまでこの学会が果たしてきた役割の一つは、まさに研究分野、専門性がバラバラであっても、志に共通点があれば仲間になれるということでしょう。我々理事会の中でも、専門性はバラバラの状態と思いますけども、初年次教育をこれからどうするのかという共通目標のもとでは結束できているわけです。理事会のそういった雰囲気は学会全体の運営の雰囲気にも反映されているのかなと思っています。それがこれまでの話です。



安永 悟・藤田 哲也

からの課題としては、やはり多様性とどう向き合うのかが最大の課題になると思います。例えばさきほど安永先生が、これからは高校でもいろいろ探究学習をしてくるから、大学との本質的な違いはなくなるだろうというお話をされたんですが、それは一部では正しいし、一部ではやっぱりそこまで楽観できないと思っています。要は高校の側での格差が激しくなるっていうような、むしろ危惧を抱いています。

例えば情報の授業一つ取ったって、アルゴリズムをきちんと学んできているとか、プログラミングをある程度できるようになってる学生もいれば、相当な割合の学生がエクセルで表計算を使えないとか、Wordが使えないという現実が皆さんの大にもあるのではないかと思います。要するにスマホでできることは修得しているのだけど、パソコンでしかできないようなことはできないままという学生が一定の割合いるわけですよ。つまり同じ学年の中で、高校でしっかりとした教育を受けていた学生は情報に関しても非常に応用力もついているし、何でもできる状態に近いけれど、できない学生は徹底的にできないに等しい状態で大学に来てしまういう格差も広がってくるわけですね。さきほどの探究学習についても、本当にきちんとした自覺的な先生の下で探究学習を積んで來ることができた学生と、表面的で形骸化された探究学習をごまかしごまかしてやってただけの学生とが

同じ学年に入ってくるという、そういう意味での多様性も拡大するでしょうし、おそらく僕らがなんとかしなくてはならない課題に、今度なっていくと思います。

僕ら大学教員の弱いところは、今高校で何が起こってるかの実態をあまり知らないことだと思うのです。初年次教育学会の先生方は高大接続といったことに少なからず关心がおありかと思うんですが、大学の同僚に目を向けたら、高校のことは知らないっていう人の方が圧倒的多数なわけです。でも先ほど来言っているように、これからは入学者の多様性がこれまで以上に増していくと予想されますから、藤本先生がおっしゃったように、初年次教育の1年間だけで、多様性を全て吸収できるバッファの役割を果たせるとも全く思っていません。むしろその多様性や個性をいかに生かしていくかを我々は考えるべきなのだけれど、これまでと違う意味での多様性が今度どんどん広がっていくのに、そういう認識自体を持ってない先生が多いと思うんですね。

初年次教育学会の役割としては、今後は各大学の同僚に向かって、1年生はどういう状態で入学してくるのか、学士課程教育としてはそれをどう受け止めるのかを情報発信することにあると思っています。4年間の学士課程のカリキュラム全体について各教学組織において議論するための端緒となるような役割も果たし、偉そうな言い方にはなりますが、我々が啓蒙していく、情報提供していく、問題意識を共有していくというのが、今後の我々の学会が意図的に取り組む課題かなと思っています。

重要課題① 初年次教育の研究をどう推進するか

安永

もう一つ大きなテーマがあります。それは研究のことです。さき頃、2022年度の初年次教育学会誌が届きました。その薄さに残念な気持ちになりました。研究は量ではなく質だと思います。しかし、量があれば質も高まると思います。学会における研究活動をいかに高めるか、今後の課題だと思っています。

藤田

これまで実践という言葉が何度か出てきていますが、実践報告と実践研究とは、やはり違うと思っています。実戦報告も大事なのですが、個々の具体的な実践事例にとどまらず、そこから抽象化できる共通の目標であったり、方法論というのを誰かがオーガナイズしていかないと、バラバラと表面的にいろんな面白い取り組みが報告されていくだけで、そこから形だけ真似て自分の授業に取り込んでもうまくいくはずがないとむしろ僕は思っています。事例に内在するエッセンスをつかんだ上で、自分自身の授業にカスタマイズしてやっと活きてくるという実践報告が多いと思いますから。実践報告をある程度抽象化し、研究のレベルでもう1回再発信する、あるいは再定義するという役割を、我々が率先して果たしていく必要があるだろうし、そういうことのできる人材を後継者として育てていかないといけないのかなっていうのを思っています。

安永

自分自身のことを思い返していると、私の「根っこ」は心理学です。たまたま心理学のなかでグループを使った教育的な活動に関心があったので、そちらをやっていました。そのなかで私自身は「協同教育」という言葉を仲間と創り、日本協同教育学会を設立しました。ベースは協同学習っていうか協同教育なんです。

その私が初年次教育の世界で皆さんと一緒に活動できるのは、専門分野としての心理学や協同教育が背後にあるからだと思います。いろんなジャンルで活躍されている研究者たちが集まって教育を検討するという姿勢は大切にしたいと思います。

実は、このことを最初に強く意識したのは、初年次教育学会の設立大会で行われた関係者によるスピーチでした。それは「自分の専門性をきちんとやっていない人が、もしくはやれていない人が、教育だったらどうにかなるだろうといった雰囲気で、この学会には参加してほしくない。それぞれの領域できちんと研究した人たちがプラスアルファで来てくれるのが望ましい。この点を忘れて欲しくない」という趣旨のスピーチだったと記憶しています。18年前のスピーチですので、私自身の気持ちで随分と脚色されているとは思いますが、私はあのスピーチを忘れることができません。

初年次教育学会を次の世代に引き継ぐときにも、この点は大切なポイントになると思います。それぞれの専門分野でがんばっている人達のなかで、教育に向いてくれる人は必ずいます。そういう人達に参加していただくことが、学際的な学会にとって必要だと考えています。

最近ご縁があって医学部の教育に関わっていて、つい先日も日本医学教育学会に出席してきました。医学を専門としている先生方で教育に強い関心をもっている方も沢山いらっしゃいます。そういう方たちに、この初年次教育学会に入ってきていただき、新しい血を入れていく。そういう活動も必要じゃないかと思いました。実際、私たちの初年次教育学会が蓄積してきた知見は医学教育の場面でも大いに活用できます。医学教育との連携の可能性も模索したらどうかと考えています。

いずれにしろ、この学会をいまからどう持っていくか、どう育てていくか、どうつないでいくかということを考える際に、多様な専門領域で活躍している先生方に参加していただきたいと思っています。私たちがいま取り組まないといけない仕事ではなかろうかと思っています。

山本

安永先生がおっしゃったことは、初年次教育学会が根源的に越境的なものであるってことと、実践の情報とか知識の共有の場であると同時に、やっぱり研究者同士が参加する場であり、そういった意識が失われてはいけないっていうお話だったかと思います。

西村

今のお話はまったくその通りだと思うんですよ。いろんな背景を持った人たちが本当に腹を割って語り合えるような場がやっぱり必要なんだろうと思います。ただ、このときすぐ起きそうなのですね、現場でこういう実践してると、それはそれで非常に貴重なんだけども、それを集めればなんとかなりそうだという発想になるんですけども。それとやっぱり理論的と言いましょうか哲学というか両方が必要なんですね。どっちかが欠けてはいけない存在なんで、そうすると藤田先生の話に戻りますけど、これはもともと本質的に抱えている問題なんで、それは一つの形として後継者をどうやって育成するのかという問題とも当然つながってくると思うんです。

山本

山田先生はどんなお考えでしょうか？

山田

今、安永先生、西村先生がおっしゃってくださった後継者をどう育てていくかは、非常に大きな課題です。それは私も2008年の設立から今まで14年の中で考えてきたこともあります。例えば、学会誌の投稿論文数が増加しないこともあるでしょうし、大学院生が初年次教育というテーマで研究をしていくかどうかも大きな課題です。つまり学会を再生産していく時に、どうしてもその分野で学んで研究をする人が増えていかないと縮小していくのは当たり前な話なんです。

私も博士後期課程で院生を育ててきましたが、その多くは私自身の高等教育とか大学教育の分野でデータを使ったり比較する研究で博士論文を書いたりします。ただ、私の院生などは同志社のFirst-Year SeminarにTAで参加してきましたから、そういう意味で教育経験とそこで見た目線を持って大学に就職して、初年次教育を担当していくから、加藤さんと同じような感じです。ただそれを初年次教育として本当に研究しているかというと、自分のディシプリンである高等教育研究や大学研究で研究をしていきます。しかし、例えばサブとしてでもいいから、初年次教育を研究課題として広げていってもっと論文なんかに書いてくれるといいなと思っていますが、そこは難しいので、若い人たちが自発的に初年次教育学会の中で、研究会みたいなところでどういう次の可能性があるかっていうことを若い人たち同士で話し合うみたいな機会があればと期待しています。

藤田

学会設立当時から、次の世代の人材をどうやって育てようかというのはずっと話題になっていたながら、やはり初年次教育学っていうディシプリンがないので、それを研究するために大学院に進学するっていう人が、現実としていないですよね。なので、メインの研究としては、僕のところでいえば心理学をやりながらも、サブでは初年次教育についてもある程度は研究している人材を育てるということをここ数年はやっています。そういうことを今後我々が積極的に取り組んでいけば、人材の裾野がある程度は広がるでしょうし、広がるとまではいかなくとも、一定数は確保できるかなと思うところです。こうしたことは我々が意図的にやっていかないと、大学教員になってから必要に迫られてという人のみが本学会に来るという状態が続いてしまうのかなという気もします。その辺は皆さんもそれぞれお考えのところはあると思いますが。

重要課題② 高大接続にどう取組むか

山田

藤田先生がおっしゃった多様性というのは非常に大事で、それから藤本選手や安永先生がおっしゃってた高校での探究学習も大事だと思います。それに関連して、実は私、日本学術会議の連携会員の中で、高大接続部会に入っています。その高大接続部会でこの間ずっといろいろやってまいりまして、今度報告を出すっていうことで、今まとめてる最中なんですが、高校での多様性が進んできている現実があります。

従来、初年次教育は、私の大学でもそうだったんですが、問題意識としては最初に申し上げたように、学力の多様化であったり、モチベーションの多様化で、多様性をどちらかというと大学にうまく適応できないところに焦点を当ててきたというところがありました。しかし、この間、高大接続部会でずいぶん調査をしたところで言うと、その多様性の

中にも高校までで、大学を超えるように学んでる子たちもやっぱり出現してきているわけなんですよ。そういう学生たちを初年次教育でどう扱うかっていうことも、これからの大変な課題になってくると思います。

言い換えれば、この間文科省でも英才教育が話題になりつつありますが、初年次教育の中でもいわゆるオナーズ的に、最初から飛び級を、早期に大学院に進学をさせるようなことを、先進国も開発国も取り入れている部分もあります。そういうところにも目を向けていく必要があるのではないかと思う。東京大学におられた山本 泰先生が会員時代に、駒場でやろうとしていた初年次教育は、まさにそういうところに焦点がおかれていました。残念ながら継続していませんが、京都大学でも同じような動きがありました。そういう優れた、モチベーションの高い学生たちも伸ばしていくような初年次教育も一つのバリエーションとしてはこれからの課題になっていき、私ども初年次教育学会もそれに目を向けていくことも必要かなと思っています。以上です。

藤本

今、山田先生がおっしゃったことを忘れないうちに申し上げますけれども、東大の駒場の先生方が金沢に来られまして、「初年次教育をやろうと思うけれども、何かいい知恵ないか」というようなご相談受けたことがあります。その時に「東大では書籍を読んで、それを記録していくことを今やり始めています」というお話をあったのですが、「それを新聞に代えたらどうでしょうか」という提案をしました。それともう一つですね、東大の場合、進振りがありますよね。ですから駒場の先生方ではなくて、専門課程の先生とか研究所の先生方は学生に来てもらいたいから、そういう方々に初年次教育に参加いただき、まさに山田先生がおっしゃったような、専門教育に近いことをやる取り組みをされたらどうですか、というお話をしたのです。その後どういう経緯があったのか知りませんけれど、専門の先生やその研究所の先生がどんどんご参加されるようになって、駒場の先生の領域というか担当範囲が非常に狭まったので、駒場の先生方が慌てたという話をちょっと聞いたことがあります。ですから初年次から専門を学べる学力を有する学生たちをどうするかということは、考えておかないといけないだろうという気がしています。

それからもう一つ、藤田先生がおっしゃった探究学習の問題で、もちろん藤田先生のおっしゃった通りであって、ちゃんとおやりになる高校もあれば、そうではない高校もあるわけです。もちろん担当される先生方の問題もあるわけですね。この前、山本先生たちと地域活動の打ち合わせをしたときもこの話題が出てまして、今は、各大学さんが出前授業みたいな形で応援されてる、それは自分の大学に来てねという意味で、募集の一環ですね。そこで学会のメンバーが、学会としてお手伝いできないか、ということも探ってもいいのかなというお話をました。ただ相当お忙しい先生方ばかりなので、なかなかそうはいかないかもしれませんけれども、そういう活動の可能性もあるのではないか、とは思っています。

先ほど安永先生も藤田先生もおっしゃったように、協同学習を高校でやってるということを前提にして、探究学習型の入試形態が出てきています。実は昨日勤務先のホームページを見ていきましたら、探究型学習の成果をプレゼンテーションする入試があるのですよ。どのようなプログラムなのか公表されていないのでわかりませんが、合格したら、1年生の時から研究室に配属することができるという入試形態ができていました。今後、そのよ

うな形態が増えてくる可能性も高いのだろうと思いますね。ですから学会として、何かそういうことにご協力できる、できないかは別として、可能性として頭の隅っこにでも置いてもいいのかなという気はします。

ただ藤田先生が先ほどご懸念をおっしゃいましたが、学生さんが探究の学習を通したスキルがきちんとできて入学してくる、とはやはり思えません。学生間の差が当然出てくるだろうと思います。

安永

まさに今話題になっている、高校の先生方のレベルと言いますかね、それがもう現実に現れています。特に、今年入ってきた学生さんたちに、高校時代にグループ活動とか探究的なことをやりましたかと訊くと、多くの学生がやってきたと言っています。探究という言葉はもうごく当たり前に高校生にも使われている。ただ、実際にその中身を見ますと、もう全く違う、という気分になります。形だけを真似ている、というのが実情です。

そのために、今までゼロから教えていた内容、私の授業の中では「ゼロから教える」というイメージがあったんですが、いまは「マイナスから入る」というイメージがあります。もう既に初年次教育が、やり方自体を変えないといけない、っていうことですね。

それから山田先生からありましたけども、すごく優秀な学生がいます。偏差値の高い中学校では「卒業論文」を書かせていると聞いています。このような学生が大学に進学した際、どのような初年次教育を提供できるのか、大きな課題だと思います。対象学生によって、初年次教育の内容や方法も常に変える必要があります。そのためにも、初年次教育の目的を再度吟味し、それを実現するための内容と方法を常に検討することが必要だと思います。

それから、藤本先生が、入試の件をおっしゃっていました。その通りだと思います。「年内入試」という言葉をよく使います。基本的に、筆記試験だけに頼らない入試ですね。この年内入試で求められている力を鍛える方法、高校の先生も、保護者の皆さんも、高校生も、基本的にはわかってないと思うんです。言葉としてはコミュニケーションとか、論理的思考と言われます。ではそれをどうやって高校時代に育てますかと訊くと、皆さん「ん？」となるわけです。そこで、高校に入ってきたいる探究活動の効果を説明すると、皆さん、話に乗ってきます。

年内入試にもさまざまな形がありますが、年内入試で何を測定しているのか、私たち大学教員がもう少しきちんと考えて、入試を担当して人たちと連携しながら、入ってきた後の初年次教育と入試をどう結びつけるか、ということを考えるのも必要と考えています。

学会の未来像—初年次教育を推進するプラットフォームへ—

山本

最後に、これから初年次教育学会はどういう方向に向いていくのでしょうか？

菊地

初年次教育がこの十数年、日本の大学に浸透してカリキュラムに位置づけられた。で、そのことともう一つ見落とせないのは、初年次教育を通して、我々大学教員もだいぶ変わってきたっていうことですね。初年次教育、1年次の学生を迎えるための様々な取り組み、プログラムのみならず、2年生・3年生・4年生の指導においても、変化が起きているんじゃないかなっていうふうに思っています。

そこも、初年次教育学会が果たした役割は大きいと思うんですが、一方において、これからその探究学習を経験した高校生が大学に入ってくる。しかしそこには大きな多様性があるという話だったんですが、その通りですけれども、実は我々大学教員の中にも大きな多様性があるということも、やはり見落としてはいけないだろうと思います。特に、大学の組織の特性だと思うんですけれども、いわゆる学部や学科の縦割りの構造になりがちで、サイロエフェクト、農場とかにあるサイロがね、ニヨキニヨキと立っていて、窓がなくて、お互いの風通しがよくないという、あるいはタコツボでも何でもいいんですけども、そういう中で初年次教育って何？っていうところは、今でもなくはないです。残念ながら。

あってもその取り組みの温度差は、学内ではやはり差があるのは実態だと思うんですね。初年次教育に限らず、先ほど私、教員のあり方もだいぶ変える、そういう力になったんではないかというふうに申し上げましたが、一方において、旧態依然たる教員層っていうのも厳然として存在している。そのような意味での我々教員の中の多様性っていうことも、やはり一方において受け止める必要があると思うんですね。

そのとき、特に高校時代に、ちゃんと真剣に探究学習の機会を得て成長してきて入ってきた学生にとっては、あまり旧来型と変わってないタイプの授業をする教員っていうのは、学生から見ると失望に直結しかねない、という問題もあろうかと思います。従って、初年次教育学会が高校の先生方に、何か我々の経験をお伝えして、少しでも力になりたい。そういうふうに私も思いますけれども、一方において、学内での我々の自己改革の取り組みというのも、さらに継続していく必要があるんではないかというふうに思いました。

西村

皆様のお話とも関係するのですが、初年次教育学会は学会員、あるいは初年次教育に関心を持っている人達にとって、プラットフォームとしての役目を果たしている点を指摘したいと思います。

例えば金沢工大の場合、新入生つまり昨日まで高校生だった人間が入学してきます。多くの学生にとっては初めての一人暮らしですから、友人関係を含めた生活面から切り替えなければなりません。高校生の意識のままでは大学の勉強にはついていけませんから、スクーデントスキルやアカデミックスキルを身につけていく必要があります。ある一人の教員が新入生に接するだけでなく、この問題に関してはこの職員が、あの問題については学友会がというように、「初年次教育」という切り口で組織全体が取り組まないといけないわけです。当時の金沢工大は比較的良い体制が作られていたと思います。これは当時の学長の教養重視、あるいは人間性や人格陶冶を大切にする考え方があったから可能になったわけですし、逆に、それが組織を作っていく面があったんだと思います。さらにその背後には、いわば哲学というか、教養教育をどのように考えるかという問題があると思います。

安永

西村先生のお話ととても通じると思いますが、「いかに」という方法論についてよく議論はされるんですが、目的ですよね、「何のために」という議論が深まっていないので、新しい概念だとか技法が入ってきたら、深く考えず、すぐに飛びつくことがあると思います。私たちは、最終的に何に向かって、何を目的としてこの活動をやっているのか、ちょっと大きな視点で議論することも必要じゃないでしょうか。そういう意味では、これ

も西村先生からありました教養教育、どういう教養を育てようとしているのか、人間としてどのような力を育てようとしているのか、その目的は非常に重要だと感じています。

忘れないうちにもう一点だけ加えさせてください。それは藤本先生がずっとやられてる FD・SD の統合といいますか、教職協働といいますか、これについて今日はあまり出てきてなかったような気がします。この点も、今後、学会として力を入れていくべき大きなテーマだと思っています。

藤田

設立当時の発起人として最初に僕が声をかけてもらった時点では、心理学をやっているのは僕だけでした。他の方は大学教育学会などで、要するに教育政策を考案するような、言ってみればマクロな視点から初年次教育はどうあるべきかを議論することに長けてる方が多かったのに対して、僕の興味は、90分の授業をどう使って学生に教えるかというミクロなところにあります。別の言い方をすれば、What, すなわちコンテンツとして何を教えるかではなくて、How, すなわちどう教えるかというところの議論が、やはりこの初年次教育にとっては肝だと自分では思っているですね。だからどんないい教科書や教材があっても、それをうまく使って授業できなかったら学生には響かないですし、どのように教えるかという議論がもっともっと重視されるべきかなと思いまして。そこで心理学が一番得意とする場になると思ったのですが、一人では心もとないので安永先生にも加わっていただいたといった経緯があります。なので今でも、What だけでなく How の部分をこの学会でももっと押し出していけたらなという思いはあります。それだけでよいということではなくて、棲み分けというレベルです。会員からのニーズとして How は絶対必要なはずですよね。別の言い方をすると、何をやるべきか決まったら、授業は業者に丸投げしたらいいだろうという話にはならないでほしいということでもあります。「これを教えておけばいいんでしょう」ということを決めただけで、もう学生に教えた気、伝えられた気になっているのではとても危ういと思います。学生に何が伝わったか、学生が何を学んだのかというところで初年次教育の成果は評価していかなければいけなくて、何を教えたかだけで評価されることではないと思ってるのです。まあそういったことをなかなか理事会などで議論する機会ないので発言しませんが、個人の思いとしてはこの15年間ずっと考えているところではあります。

山本

加藤先生。これから初年次教育をどのように展開していきたいか、そのために初年次教育学会がどうあるべきかっていう将来に向けたお話をいただけますか？

加藤

なんか壮大な論点を頂いてしまって。そうですね、ここ4年ほど大学教員をやってみての、本当に主観的なところをお話しさせていただくのがいいかもしないんですけど、やっぱり実際に初年次教育いろいろやりましょう、工夫しましょうよっていうふうに大学の中でやろうとしても、やっぱり一人二人教員が声をあげるだけだとなかなか難しいなっていうのをよく感じるようになっていて、私は先生方と違って、先に院生のときに初年次教育学会に触れて、ああ先生方はこういう取り組みしてらっしゃるんだなっていうのを感じてから教員になったので、いろんな大学でもうすでにいろんな取り組みしているんだろうな、というような期待を持って、実際に飛び込んでみたんですけど。

もちろん初年次教育っていう取り組み自体っていうのは実際に行われているとはいいうものの、やっぱり教員間での温度差とか、実際、初年次教育科目が設置されてはいるものの、本当にこれちゃんとできてんのかなっていうようなところがあって、浸透してるとは言いつつも、全学的に先生方がきちんと取り組んでいらっしゃるかなっていうと、ちょっとそこはまだ疑問が多いところだと思っていてですね。逆に言えば、学会の役割としては、今日の藤田先生もおっしゃったと思うんですけど、啓蒙っていう役割を引き続き持つっていうのが必要なのかなというふうに思います。

あとは、私が今いる多摩大学でも、ここ最近、同年代というか少し上の歳ぐらいの若い教員の方が増えたんですけど、いろんな研究領域の先生方と話してると、学生に対してできるだけいい形で授業をしようとか、学生にプラスになるようにいろいろ工夫しようっていう意気込みを非常に強く感じるところなので、やっぱり若手の同年代ぐらいの先生方で勉強会をやったりとか、もうちょっと大きく研究会シンポジウムみたいなものをできるようになれたらいいなっていうのは私としても思っているところですね。

若手教員だけだと、一人二人だけだとどうにもならないっていう部分もやっぱりあるので、ちょっと上の先生方が、じゃあそういうことであれば私も協力しますよっていう形で、同じようにご協力いただけるなら、めちゃめちゃ心強いなっていうそういう方が各大学にいたらいいなっていうふうに思うところではあったりするので。若手も頑張るので、先輩方もご協力をお願いしますっていう。

山本

初年次教育をちゃんと学士課程教育の中で位置付けて、成果を出すためには、現場の先生が頑張るっていうのはもちろん必要条件なんだけど、十分条件としてやっぱり学長だとか学部長だとか、学位プログラム全体をマネジメントする人の意志がないと、どうにもならないっていう面は確かにあるんですよね。

西村

先ほど初年次教育が大学を変えたお話をしましたが、一つ大事なことを忘れてました。明星大学が典型なのですが、決して菊地先生お一人で初年次教育を進めているのではなく、複数のコアな人たちが中心になって、組織的に運営して初めて初年次教育が可能になるんですね。誰か一人に依存してると、決して長続きしません。

山田

大学のマネジメントは本当に大事なポイントでありまして、それは初年次教育をどう位置づけていくかは、大学において、うまくいかあまりそうでないかの分け目になるかと思います。

今思い出してみると、明星大学さんで初年次教育学会を開催したことがございました。その時私が司会をしていた部会にその後学長になられた落合先生がスタッフとしてお手伝いをされていました。大変驚きましたが、今考えてみると、一橋大学から退官されて明星に来られて、その初年次教育学会をお手伝いすることで、初年次教育を生身でお知りになって、現在につながっているのかなと思いましたが、そういうことって非常に意味があると思います。

初年次教育学会は、学長の輩出率が一番高い学会だっていう噂がありました。岩井 洋先生もそうだし濱名先生もそうだし、それから笹金 光徳先生とか。マネジメントに関わっ

ていく比率が高い学会でもあるかもしれません。私自身も自分を振り返ってみると、初年次教育学会の会長になったときに、同志社大学の教育開発センター長を拝命して、初年次教育を全学で広げていくことができるポジションにありました。たまたま2004年に社会学部が文学部から分かれて改組したときに、初年次教育を First-Year Seminar として必修化することを決めて、ずっとルーティンができるようになりました。その後、自分が学部長をした時もそうだったんですが、大きな大学ってやはりきめ細かいところにみんなの目が行かないで、ルーティンが出来上がることで踏襲していく形がマネジメントの一つの形になります。

そういう意味で言うと、この学会には大きな大学が機関会員として入会していないことがあって、それが大きな大学の限界かもしれません。個人の教員で一人が入っても、大きな大学の中で組織運営していくには、かなりのエネルギーが要りますので、この学会が学長とか執行部の先生方が多いっていうのは、中堅のサイズの大学が機関会員として入っていることが大きいのかなと思うんですね。

だけど今後、先ほど私が申し上げた多様性っていうことを考えると、大きな大学にも入っていただかないと、広がりが根付いていかないので、そのあたりをどうするかっていうことを本当に考えていきたいなと思います。

山本

終盤に近づいておりますので、先生方、まだ言い足りないというか、これは言っておきたいということがありましたら、いかがでしょうか。

安永

理事を辞めた後に、今度どんな形で学会と関わっていけるんだろうか、新しい関わり方を自分なりに模索してみたいと思ってます。そうすることで、少しでも学会のお役に立てればと思っています。

藤本

マネジメントの話で山田先生のお話を伺って、もちろんその通りだなと思っています。私が今いる大学に着任したとき、ちょうど会長でしたので、実際その会長の肩書きがものを言ったんですね。そして教育改革本部長に任命され、その立場で発言することで、初年次教育のシステムとプログラム上の位置付けを確定することができました。

初年次教育が発展的に解消して欲しいという私の希望的観測とは逆に、多くの大学では、このまま初年次教育はずっと残っていくと思います。しかし、西村先生が言われたように、学長が変わるとコロッと変わるという事例ですが、実際私もいくつか知っています。その大学のものの考え方、あるいは学長さん、新しい学長さんのものの考え方によっては、変わってしまうこともあるわけで、学長さんが変わるとスタッフも変わりますよね。加藤先生がちょっと心配されていますが、何人かというよりも、できれば多くの先生方が一緒になってやらないと、そういう場合の意見具申にもならないというような気はします。

藤田

今までの議論を踏まえた上で、今後学会として意図的にやっていかなければいけないと個人的に思っていることは、やっぱり人材発掘と人材登用だと思うんですね。

「立場が人を作る」という言葉に、割と僕は実感を持っています。僕自身振り返っても15年前、まだ40代で理事の末席に加わったような立場だったんですが、気がつけば今は

会長という、当時の自分には想像できない状況にあります。ステップとしては事務局長をやっていますし、その前は学会誌編集委員長もやっているのですが、その時々で、自分にはまだ早いんじゃないかな、荷が重いと思いつつも、思い切って引き受けて、がむしゃらにやってるうちに、それが皆さんにもポジティブに受け入れていただけて…という積み重ねで、今日に至っていると思うのです。自分一人の努力というようなことを喧伝したいわけではなくて、組織として人を育てるということを受け入れる土壌があり、また育ててもらったっていう思いもあるわけですね。

同じことは他の方にも起こる、起こっていかなければいけないと思うので、まだ若手をどう育成するかという議論は十分に尽くされてはいないと思うのですが、理事会としても新しい若手の人をどんどん要職につける、たとえば委員会の委員長にしていくようなところから始めて、自信を持ってもらうことが有益だと思います。そうした経験が、結局自分の大学に戻ったときに発言力を強めるための土台にもなっていくと思います。学会での役職という肩書きがあると、ものを言いやすいということもあると思ってます。加藤さんの世代の会員にも、次期役員改選では理事になってもらったりいいなと思うところもあります。誰が役員になるのかは僕が決めることじゃないですし。立候補制でもないから別にここで決まるわけでもないのですが、我々の世代は、次に理事になってもらいたい方に投票するということを意識的にやったらしいのではないかなとは思っています。

つまり、従来の理事中心に、あまり保守的に役員を固めていくとメンバーがいつまでも変わらないというのも懸念事項ではありますので、中・長期的にこの学会が続いていくためにはやはり世代交代を何らかの形で具現化する必要があるかなと思っています。

藤本

若手、若い方々が学会の運営に参加されるというのは非常に大事なことだと前から思っていることです。理事以外に、理事に準ずるといいますか、大学でいったら評議員ですね。例えば理事が若手メンバーをいずれかの委員会に推薦できるという以外にも、評議員の選出も一つのやり方かなと思います。そうすると名簿に載って、いずれかの委員会に所属していただくようなことを考えた方がいいのかもしれません。若い方々を入れるという意味合いで。名称はちょっと考えることになるかもしれません、そういうことも一つの方向であってもいいと思います。

加藤

単純なことなんんですけど、先生方のお話を聞いて改めて思ったのが、やっぱり同じぐらいの立場の仲間が欲しいなっていうのが強く思ったところなので、先生方よろしければ若手の先生をお説きいただきたい、私も多摩大の中で、いろいろいろんな先生にお声がけしようかなと思うので、ぜひ若手が徒党を組めるように(笑)、っていうのを自分でも頑張っていきたいなと思います。

藤田

一つの方法として、例えば大会のラウンドテーブルなどを機会として、若手の先生だけを集めて問題提起するというやり方もあると思います。あるいは、例えば地方でやる実践交流会



藤田 哲也・加藤 みすき

のときに、若手の先生が中心となった発表会や討論会を企画することは可能だと思うんですね。そういうやり方を戦略的に広げていくことも一つの方法だと思ってます。

加藤

ありがとうございます。今年、多摩大できればよかったのかもしれないんですけども、来年以降にちょっと検討したいなと思います。

藤田

情報交換会に来てくれるような若手に積極的に名刺配ったりして、なんとか繋がりを持っていきつつ、いざという時には少し強引にでも発表してもらうなどして、場を作っていくことが大事だと思います。手を上げてくれるのをずっと待ってても、お互い変な遠慮があつたりすると思うので、少々強引さが必要なところもあるかなとは思います。頑張ってください。

加藤

はい。

菊地

この学会から、いろんな先生方、職員の皆さんに教わったことはもう数えきれないほどあって感謝しきれないんですが、一方において結局自分たちの大学の初年次教育を作っていくとき、一番のインスピレーションというか一番のアイデアというか、そのものズバリをこう言ってくれたのは誰かっていうと学生なんですね。学生なんです。

ですからやっぱり忘れちゃいけないのはやっぱり学生じゃないかなっていうふうに思います。学生たちの声も意見も必ずしもロジカルじゃなかったり、何か論拠に基づいてるわけではなかったりする。だから取るに足らないこととして退けるのではなくて、やはりそこにしっかりと耳を傾けるっていうことが実はこれから未来につながっていく教育を構想する一番の出発点になるんじゃないかということをいつも思っています。私の専門が、人類学なものですから、そういうところに耳を傾けてそこから何かを汲み取るということを大事にしたいといつも思っていて、それはこれからも変わらないだろうと思っています。

以上

<企画2>

初年次教育実践交流会の来し方行く末

発足の経緯

2014年9月の理事会において、初年次教育実践交流会の発足が認められた。発足の事情は安永 悟会長(当時)から、初年次教育の地方への普及のため学会としてどのような活動ができるか、という問題提起があったことに発する。

学会ではそれまで、主として年度に1回の大会開催と学会誌の刊行をもって、個人会員、機関会員の研究発表の場、実践事例情報の交換の場、ワークショップなどを提供してきた。全国の大学において初年次教育の実施率が高まりつつあるなか、多くの成功実践事例があること、また逆に実践に困難をきたしている事例、初年次教育の次なるステージ(上級学年プログラムとの関係、接続など)への転換などを見出せるようになっていた。一方で、初年次教育をどのように実施すべきか検討中の大学の存在も事実であった。

このような状況において、本学会としていま少し密度をもった情報交換や事例・研究等の発表機会を設けることができないか、との検討がおこなわれた。その結果、実践交流会の運営主体は「地域活動活性化ワーキンググループ」(当時；現「地域活動活性化委員会」)が担い、実施形態や内容、さらには他学会や研究会との協力・連携などについて今後の展開のなかで検討することになった。

実践交流会の目的、実施形態、開催方法、方向性等の大枠については、本学会「ニュースレター」(第7号、2015年3月)の安永会長による巻頭言「『初年次教育実践交流会』始動」をご参照いただくとして、ここではその後に追加した項目を含めて、その骨子を示しておきたい。

1. 目的

- 1) 初年次教育に携わる教職員が、創意工夫を凝らして展開している実践活動をさらに振興すること
- 2) そのために、実践者が気兼ねなく集い交流できる場を、地域ごとに、できるだけ頻繁に提供すること
- 3) 初年次教育の質的向上をめざし、初年次教育に関心のある人々を対象に、積極的な交流を活性化し、参加者同士が協力・協同して、より望ましい初年次教育の実現に向けた具体的な活動が創発されること
- 4) 本学会だけでは十分に提供できない教育に関する情報を会員に提供し、類似した志向性をもつ幅広い関係者との交流を実現すること

2. 開催方法

- 1) 学会主催
- 2) 他学会や研究会との協力・連携開催
- 3) 会員の依頼による開催支援

※初年次教育担当者のメリットを第一義に考え、地域ごとの実情を加味しながら決定

3. プログラム

- 1) 実践事例発表
- 2) 研究発表
- 3) ワークショップ
- 4) 講演会
- 5) クロストーク
- 6) その他

4. 発表者, 参加者

- 1) 発表者は原則として、開催地域の会員もしくは機関会員
但し理事会の承認によって、開催地域以外の会員・機関会員および非会員も発表できる
- 2) 参加者は会員であることを問わない

2022年度までの開催については別途掲載するが、これまで北陸(金沢), 関東(東京), 九州(久留米, 熊本)において開催してきた。各地域での活発な開催が期待されてはいるが、近年は金沢, 久留米での開催が主となり地域の支部会の様相を呈している。設立の目的に必ずしも沿ってはいないが、開催地域での参加者は常に50名を超えており、その意義は決して小さくはなく、今後も開催の継続をおこなうことにしてはいる。

また各地域で実践交流会開催を希望する場合は、ご遠慮なく学会までご相談いただきたい。その地域の実情に合わせた実施形態と内容および方法について、ご一緒に考え、創つていきたいと考えており、できる限りの支援をいたしたい。

なお高大連携教育の必要性が高まるなか、「地域活動活性化委員会」に加えて「将来構想実行委員会」とともに、今後どのような支援や協力が可能なのか、支援メンバーなどについて、新たな方向性の検討も進めたいと考えている。会員各位のご意見をお願いする次第である。

藤本 元啓(崇城大学)

初年次教育実践交流会の成果

2014年度（平成26年度）

1. 「授業づくり研究会」(久留米大学)

日 時：2014年9月20日(土)13:00～17:00

場 所：久留米大学御井学舎学生会館3階ミーティングルーム3

参加者：52名

実施母体：安永 悟研究室(久留米大学)

内 容：

(1) 実践報告

石山 信幸(久留米市立南筑高等学校)

題 目：「協同学習を中心とした高校数学の授業改善—授業進度の加速と学力保障—」

内 容：協同学習に積極的に取り組んでいる南筑高校での実践報告

参加者の声：協同学習は時間がかかるという一般的な認識があります。しかし、生徒の力を徹底的に信じ、授業を工夫することで、それは誤りである可能性を、本実践は物語っていました。学力の差が大きく、計画通りに進まないことが多い数学の授業において、進度を速め、かつ成績も伸びたという結果に、参加者一同から感嘆の声があがりました。(須藤 文、久留米大学)

(2) 技法の体験

須藤 文(久留米大学)

技法名：ジグソー学習法

題 目：「アドラーの言葉から自分の教育を振り返ってみよう」

内 容：協同学習の技法として最もポピュラーな技法「ジグソー学習法」の体験。

講師の感想：現在多くの注目を集めている「アドラーの言葉」を手がかりに、自分の教育を振り返り、参加者の皆さんと交流しました。アドラーの言葉と自分の授業を関連づけ、専門家グループでもジグソーグループでも、活発な意見交流がなされました。特に、最後に行った、全体交流では、発表者の意見に共感したり感心したり考えさせられたりと、それぞれの教育観を問い合わせるものとなりました。(須藤 文、久留米大学)

2. 初年次教育実践交流会(学会主催)

日 時：2014年12月5日(金)15:30～17:00

場 所：崇城大学図書館6階多目的ホール

参加者：40名

協 力：Q-Links事務局 & 崇城大学

題 目：「初年次教育とアクティブラーニング」

話題提供：松下 琢(崇城大学)・藤本 元啓(金沢工業大学)

進行：田中 岳(九州大学)

内 容：司会の田中先生のファシリテーションにより、話題提供者2名と会場参加者とによるクロ

ストークが行われた。話題提供者からのライトニングトークを受けて、会場参加者は明らかにしたい論点を小グループで検討。その内容やコメントがホワイトボードに書き出され、話題提供者はそれに応えて(答えて)いく、レスポンシブなワークショップ。会場で検討された内容は、ファシリテーション・グラフィックにより共有された。

参加者の声：私自身、実践交流会に参加し、初年次教育においてアクティブラーニングを実践する上で必要なことは、授業を行う教員、授業をサポートする職員、授業を受講する学生の意識改革が重要だと感じました。また、従来の詰込み型の勉強スタイルから、自ら考え、発言、行動する勉強スタイルへと変えることで、将来の社会人としての基礎が学べるのではないかと思いました。(前田 和則、崇城大学)

3. 初年次教育実践交流会「日本リメディアル教育学会九州・沖縄支部会第7回九州・沖縄支部大会」

日 時：2014年12月13日(土)13:30～17:40

場 所：久留米大学御井学舎学生会館3階ミーティングルーム1・2・3

参加者：約70名

実施母体：日本リメディアル教育学会九州・沖縄支部会

協 力：初年次教育学会・授業づくり研究会(安永 悟研究室)

(1) 研究発表

英語部門3件、ICT活用部門3件、協同／協同・習熟度別学習部門4件の発表が行われた。詳細については日本リメディアル教育学会ニュースレターNo.73を参照のこと。

(2) 基調講演

青木 多寿子(広島大学大学院)

題 目：「大人数の教職必修科目で行う LTD 話し合い学習法—理論的背景と実践の工夫を含めて—」

内 容：協同学習による教育の必要性と具体的な工夫、さらには、その有効性に関する理論的かつ実証的な解説

参加・協力者の声：今回、日本リメディアル教育学会の寺田貢会長との連携で、初年次教育学会と授業づくり研究会が協力するという形で、日本リメディアル教育学会九州・沖縄支部大会を久留米大学で開催することができました。

3部門に分かれた10件の研究発表があり、各会場で参加者の熱心な議論が展開されました。また、基調講演では協同学習を展開する際の具体的な創意工夫のみならず、協同学習を支える認知心理学を中心とした理論的な背景を知ることもできました。

今回、日本リメディアル教育学会との協力で、このような形の「初年次教育実践交流会」を開催できたことは、大変意義深い試みであったと評価しています。(安永 悟、久留米大学)

4. 初年次教育実践交流会「授業づくり研究会」

日 時：2015年1月31日(土)13:00～17:00

場 所：久留米大学御井学舎学生会館3階ミーティングルーム3

参加者：58名

実施母体：安永 悟研究室(久留米大学)

内 容：

(1) WS

鹿内 信善(北海道教育大学)(2時間15分)

題 目：「協同の学びをひきだす看図アプローチ」

内 容：看図アプローチに基づく授業づくりについて、下記の点を中心に検討

- 1) オリジナルなヴィジュアルテキストを使う方法
- 2) 教科書や普通の書籍からヴィジュアルテキストを探してくる方法
- 3) 人権教育や教科教育に応用する方法 4 高校数学授業のビデオ視聴と検討

参加者の声：はじまった瞬間から、参加者は鹿内ワールドに引き込まれました。参加者全員、絵図を食い入るように見つめ、想像を膨らませていました。たった一枚の絵図から、いつの間にかすばらしい作文ができあがったことに、驚きました。その後、グループで作文を読み合い、それぞれの持ち味の良さを堪能しました。作文を仲間から褒められ、笑顔いっぱいのワークでした。(須藤 文、久留米大学)

(2) 報告

野上 俊一(中村学園大学)他(25分)

題 目：「看図アプローチによる見る力の分析」

内 容：保育教育において、学生は「保育者として見る力」を獲得していく。この見る力を評価する手段として看図アプローチを用いた研究を報告。

参加者の声：看図アプローチの活用例を紹介していただきました。同じ写真でも、保育実習前と、保育実習後の学生では、読み取ったことに関する関連づけに差が出るというのは興味深い結果でした。アセスメントツールや協同学習ツールとしての看図アプローチの可能性を感じさせる報告でした。(須藤 文、久留米大学)

2015年度（平成27年度）

1. 初年次教育実践交流会(北陸地区)

日 時：2015年12月5日(土)12:00～17:00

会 場：金沢工業大学12号館アントレプレナーズラボ4階イノベーションスタジオ

テーマ：初年次教育科目におけるAL(アクティブラーニング)の実践

主 催：初年次教育学会地域活動活性化委員会

プログラム司会：渡辺 達雄(金沢大学)

(1) 開催趣旨説明

藤本 元啓(金沢工業大学)

(2) 実践報告

垣花 渉(石川県立看護大学)

「石川県立看護大学の初年次教育科目『フィールド実習』—地域を舞台にしたスタディ・スキル教育の実践と展開—」

小島 佐恵子(玉川大学)

「玉川大学の初年次教育科目『一年次セミナー102(リサイクル・プロジェクト)』—環境を意識した子供のためのおもちゃ製作—」

○若月 博延・下口 治美・矢澤 建明(金城大学短期大学部)

「金城大学短期大学部の初年次教育科目『日本語表現』—第二専門を目指したチームワークティーチングの試みー」

杉谷 祐美子(青山学院大学)

「青山学院大学の初年次教育科目『(教育学科)基礎演習』—レポート・ライティング教育における個別学習とグループ学習ー」

(3) フロアとの意見交換

司 会：藤本 元啓，登壇者：垣花 渉・小島 佐恵子・若月 博延・杉谷 祐美子

(4) 総括

総 括：西村 秀雄(金沢工業大学)

参加者：54名(高等学校教員：5名，専門学校職員：1名，大学教員：42名，大学職員：4名，企業関係者：1名，新聞社記者：1名)

参加者の声：今回の実践交流会ではアクティブラーニングや書くことに拘った4大学の多様な実践事例が報告された。

報告後の全体に関わるディスカッションでは、まず添削や各種の支援に関する教職員の負担ならびに学生の活用について質疑が行われた。石川看護短期大学の事例では、学生の活用は行っておらず、教員負担の低減のためにクラスの小規模+複数担当が行われていることが印象的であった。玉川大学の事例では同じシラバスで複数クラスが進行していることから教員間で資料作成の分担や精神的な負担の低減は進んでいるが、TA自体は大規模クラスでなければ配置されず、支援はボランティアに依存しているとのことであった。

一方、金城大学短期大学部の事例では、ファシリテーション研修、チームティーチング、ループリックの活用を通じて担当教員間での作業分担と義務感とが高まるとの説明があった。青山学院大学の事例では博士後期レベル、修士レベル、専門領域の関連で、可能な範囲でのTAの支援を得ているとのことであった。

質問の中からは、教員負担については大学の規模だけでなく、設置者によって教員の負担が相当に異なることが明らかになり、大規模私立大学特有の状況をどのように克服していくのかが改めて課題として露わになったように思われる。

また特に初年次段階で自己PRも十分できるわけではない学生に論文執筆を求めるこの意味、成果についての意見交換が行われ、短期大学においては論文執筆というよりも書くという行為を体験すること、そして文章を書くことがそれほど難しいことではないことを気づかせることが目的であるとの説明があった。一方で、青山学院大学では新学部で必修化された卒業論文執筆やその前提としての3年次からのゼミにつなげるために、あえて論文を書くという経験をさせていることが紹介された。

西村 秀雄先生の総括を通じて、今回の実践交流会における報告や金沢工業大学での実践例の共通性について、第一に事前準備(制度設計、事前教育)の重要性が意識されていること、第二に各ステップでの振り返りの重要性が意識されていること、第三に教育効果の測定・評価の問題が残っていること、そして第四に各大学・地域の実情に即した初年次教育が求められていることが参加者内で共有された。(沖 清豪、早稲田大学)

2016年度（平成28年度）

1. 久留米大学（「授業づくり研究会」共催）

日 時：2016年5月7日（土）13:00～17:00

会 場：久留米大学御井キャンパス学生会館ミーティングルーム

テーマ：協同学習の基本的な考え方と技法

報告者：安永 悟（久留米大学）

参加者：57名

概 要：

協同学習の基本的な技法を体験的に理解し、その背後にある「協同の精神」について、調査結果を手がかりに検討した。加えて、LTD話題話し合い学習法を基盤とした授業モデルの開発と異校種接続について話題提供し、参加者と討議した。

2. 初年次教育実践交流会 in 関東

日 時：2016年5月28日（土）12:30～17:30

会 場：文京学院大学本郷キャンパス

テーマ：初年次教育でどのように学生のモティベーションを維持するか

報告者：

藤本 元啓（崇城大学）

「初年次教育におけるポートフォリオの活用と課題」

廣瀬 清英（岩手医科大学）

「ビブリオバトルの活用と初年次教育」

川越 明日香（長崎大学）

「初年次教育に生かす教学 IR」

鈴木 浩子（明星大学）

「教職協働による学部学科横断の初年次教育」

(1) 意見・感想のホワイトボード落書きタイム

(2) パネルディスカッションおよびフロアとの意見交換

題 目：「初年次教育の課題・問題点」

司 会：藤本 元啓

パネラー：廣瀬 清英・川越 明日香・鈴木 浩子

参加者：62名

概 要：

初年次教育の学修内容、授業手法、ツール、評価法、学内での理解度など様々な観点からの報告と、フロアとの意見交換で活発な議論が行われた。あらかじめ参加者にポストイットを配り、質問や意見を求め、休憩時間にホワイトボードに掲示していただいた。パネルディスカッションは、報告者への個別質問と全体質間に大別し、回答と質疑を繰り返した。全体質問では、①初年次教育と後継科目との接続、②初年次教育の全学実施の工夫、③アクティブラーニングへの理解度、④ライティング授業の運営、⑤学生間格差への対応、⑥学生への学習動機付けなどがあった。これらは初年次教育に携わる教職員の共通の悩みとも言え、今後とも本学会の課題となろう。

なおキャリアセンター、学修支援センター等に所属する教職員の参加が多かったことは、初年次

教育の全学実施体制を目指す方向性が認められる。また関東地区の開催であったにもかかわらず、関西、東海地区の教職員、教育産業関係者の参加もあり、本交流会の定期的な地方開催ニーズは高いものとみられる。

2017年度（平成29年度）

1. 初年次教育実践交流会 in 北陸

日 時：2017年5月20日(土)13:00～17:00

会 場：石川県政記念しいのき迎賓館2F ガーデンルーム

テーマ：医歯薬看護系におけるアクティブラーニングの実践と展開

報告者：

本田 康二郎(金沢医科大学)

「医学部初年次教育の標準型をめざす模索—PBL, AW, CT の三位一体教育システムとその展開—」

一ノ山 隆司(金城大学)

「看護基礎教育における初年次教育2年間の試み(『覚える』学習から『考える』学習へ)—アクティブラーニングの定着化とPBL・IBLへの準備—」

中越 元子(北陸大学)

「生徒から自ら学ぶ薬学生への変容を支援する『イグナイト教育』の展開—いわき明星大学での実践を事例に—」

垣花 渉(石川県立看護大学)

「看護学生の主体的に学ぶ力を地域で育てる—スタディ・スキルズの育成と経験の振り返りに着目して—」

(1) 意見・感想落書きタイム

(2) パネルディスカッションとフロアとの意見交換

題 目：「初年次教育とアクティブラーニングに関する課題」

コーディネーター：藤本 元啓(崇城大学)

パネリスト：本田 康二郎・一ノ山 隆司・中越 元子・垣花 渉

(3) 総括

総括：西村 秀雄(金沢工業大学)

(4) 名刺交換会

概要：

石川県のみならず、京都、岡山、新潟、東京から70名の参加者があり、活発な意見交換がなされた。医・薬・看護系における初年次教育の実践報告だけあって、少人数クラス、1クラス複数教員の配置、初年次科目の科目間連携、キャリアを意識した内容など専門性に接続した運営がなされていた。

パネルディスカッションでは、今回の報告大学が国試を重視する職業系学科であるため、国家資格受験対策という命題と初年次教育との関わりについての議論が起こった。結果的には、医者、薬剤師、看護師のいずれにも汎用的基礎的能力の修得は必要であり、初年次学生時に、それに必要な内容を倫理的行動とともに身につけることが重要であるとの認識で一致した。いずれも人の生命や健康に携わる職業人の要請に目的を持つということに尽きると考える。(藤本 元啓、崇城大学)

2. 久留米大学

日 時：2017年7月22日(土)10:00～17:00

会 場：久留米大学御井キャンパス学生会館ミーティングルーム3

内 容：「協同教育フェスタ」の目的と内容の説明

(1) 挨拶・導入

(2) 基礎理論と技法

講 師：安永 悟(久留米大学)

内 容：学び合える支持的・協同的な場づくりを通して、協同学習の基本的な考え方と技法について体験的に学ぶことができた。特にLTDの基本を解説し、図表の読み方の指導法としての看図アプローチにも言及があった。

(3) 実践・研究報告

【実践・研究報告1】

題 目：「LTD based PBL—実践のポイントと効果—」

講 師：長田 敬五(日本歯科大学)

内 容：これまで実施してきたPBL(問題基盤型学習)に替わる学習方略として考案されたLTD based PBL(LTDに基づく問題基盤型学習)に関して、実践上の留意点と、その成果が報告された。

【実践・研究報告2】

題 目：「協同学習を基盤とした避難所運営ゲーム(HUG)でめざす大学生の地域防災・減災意識の育成」

講 師：牧野 典子(中部大学)

内 容：学部2年生を対象とする科目「地域の防災と安全」へHUGを導入した事例が紹介された後、参加者も実際にHUGを体験した。そのうえで、避難所生活やその運営に欠かすことができない「協同の精神」を育成するために、より良い授業づくりについて話し合いがもたらされた。

協力者：HUGカードの読み手兼ファシリテーター・鈴木 保利・安井 史子・田中 正純(春日井市安全・安心まちづくりボニター)・神村 和也・田中 千尋・藤井 琴実(中部大学生、NPOセンター災害対策プロジェクト)

(4) 全体交流

ファシリテーター：須藤 文(久留米大学)

内 容：協同学習に関して疑問に思っていることや質問したいこと、さらには自分の実践について、参加者同士が自由に交流しながら理解を深めることができた。その際、協同学習の考え方と技法を用いて活動が構成されており、協同学習の経験知を高める場としても活用できた。

概 要：

ゆいかじ協同教育研究所「結風」主催の「協同教育フェスタ」を「初年次教育実践交流会」としてお認めいただき、初年次教育学会との共催という形で開催した。参加者は83名であった。

地元福岡からの参加者が中心であったが、関東、中部、関西や沖縄など、遠方からの参加者も多かった。今回は、協同学習による教育改善に取り組んでいる久留米大学医学部からの参加者が数多く含まれていた。多くの参加者と積極的に交流ができ、深い学びをえることができた。(安永 悟、

久留米大学)

3. 久留米大学

日 時：2017年12月9日(土)13:00～17:00

会 場：久留米大学御井キャンパス学生会館ミーティングルーム3

内 容：協同の技法をもちいた自己紹介を通して、協同学習の基本技法である傾聴と復唱(ミーリング)、ラウンドロビンやシンク=ペア=シェアなどを体験することができた。加えて、協同学習に関する最近の動向が紹介された。

(1) 挨拶・導入

安永 悟(久留米大学)

(2) 実践・研究報告

【実践・研究報告1】

題 目：「LTD 基盤型反転授業の試み」

講 師：安永 悟(久留米大学)

内 容：講師が提唱している LTD 基盤型授業モデルに依拠した反転授業についての実践報告がなされた。具体的には、反転授業について簡単な解説の後、LTD を基盤とした反転授業を取り入れている専門科目「教育心理学 II」の実践例が紹介された。

【実践・研究報告2】

題 目：「学生の主体的・協調的な学びをもたらす反転授業—山梨大学の事例—」

講 師：塙 雅典(山梨大学)

内 容：山梨大学では2012年度より、学生の主体的・協調的な学びを促す授業方法の研究に着手し、議論を重ねた結果たどり着いたのが、今日「反転授業」と呼ばれる方法であったことが紹介された。そのうえで、アクティブラーニングと反転授業の関係、反転授業の実施方法、山梨大学の反転授業の実践例とその成果、5年の実践から見えてきたこと、などについての報告がなされた。

(3) 懇親会

概 要：

ゆいかじ協同教育研究所「結風」主催の「授業づくり研究会」を「初年次教育実践交流会」としてお認めいただき、初年次教育学会との共催という形で開催した。参加者は46名であった。

今回の研究会では、上記のように「反転授業」を中心テーマとして取り上げ、反転授業を支える協同学習(LTD 話し合い学習法)について、および、山梨大学での実践例を中心に意見交換をおこなった。(安永 悟、久留米大学)

2018年度(平成30年度)

1. 初年次教育実践交流会 in 北陸

日 時：2018年5月26日(土)

会 場：石川憲政記念館しいのき迎賓館

主 催：初年次教育学会地域活動活性化委員会

共 催：石川県公立大学法人「楽しい活動性の高い授業つくろう会」

プログラム：司会・澤田 忠幸(石川県立大学)

(1) 趣旨説明

垣花 渉(石川県立看護大学)

(2) 実践報告

寺西 望(金沢高校)

「『総合的な学習の時間』の実践—真正の学びを目指して—」

井川 健太(金沢泉丘高校)

「本質的理解につなげる授業作り—Brain'son を目指して—」

北山 幸枝(石川県立看護大学)

「大学生としての学び入門—情報リテラシー教育を通して—」

小椋 賢治(石川県立大学)

「専門課程の導入としての AL—有機化学と食品学各論の実践—」

(3) パネルディスカッション

題 目：「高校と大学の接続教育と AL に関するフロアとの意見交換」

コーディネーター：藤本 元啓(崇城大学)

指定討論者：山本 啓一(北陸大学)

総 括：西村 秀雄(金沢工業大学)

概 要：

①高等学校教員の報告には、ワークシートの活用を前提とした「個人思考→グループ討議→発表→討論」のサイクルでの授業(総合学習)をおこなって効果をあげている。

②高等学校「物理」では、「講義→実験・演習・発表→確認テスト→振り返りシート(紙媒体のポートフォリオ)」をサイクルとする授業形態を実施

③高等学校全体の課題として、学習指導要領の制約、教科間の連携等があげられた。

④大学側の報告は目新しいものはなかったが、振り返りシートの活用は学生教員双方に有効なツールとして認知されているとの報告があった。

⑤パネルディスカッションでは、学修サーキット、カリキュラム上での初年次科目の位置づけ、組織的な学習スキル展開(例えば表現力、思考力、発進力、協働などPBL型科目の学年進行にともなう質的実施)が最も重要であることへの議論が集中し、各大学・高等学校での課題となっている点が確認された。

参加者 52 名。遠方は鹿児島からの参加者あり。次年度も金沢で開催の予定。(藤本 元啓、崇城大学)

2. 久留米「協同教育フェスタ」

日 時：2018年7月21日(土)10:00～17:00

会 場：久留米大学御井キャンパス学生会館ミーティングルーム3

(1) 挨拶・導入

安永 悟(久留米大学)

(2) 実践研究

清藤 弥希(福岡県立輝翔館中等教育学校)

「化学的な見方や考え方を育てる『化学基礎』学習指導—『シンク・ペア・シェア』を取り入れた単元構成を通して—」

石山 信幸(久留米市立南筑高等学校)

「協同学習による評価の始め方—高校数学の授業づくりを通して—」

(3) 理論研究

原田 信之(名古屋市立大学)

「子どもの学習に何が最も効果的か—ジョン・ハッティの学習者を生かす教育のエビデンス—」

(4) 協同教育カフェ(全体交流)

(5) 事務連絡・閉会

概要:

協同教育研究所「結ゆい風かじ」主催の「協同教育フェスタ」を「初年次教育実践交流会」としてお認めいただき、初年次教育学会との共催という形で開催している。今回の参加者は北海道から沖縄まで、70名を超える参加者があった。

3. 初年次教育実践交流会 in 東京

日 時: 2018年8月29日(水)14:00~17:00

会 場: 創価大学中央教育棟4階 AW401教室

テーマ: 新入生の文章表現・ライティング指導の課題と工夫

主 催: 初年次教育学会地域活動活性化委員会

共 催: 創価大学学士課程教育機構

後 援: 日本リメディアル教育学会、大学コンソーシアム八王子

司 会: 関田 一彦(創価大学)

(1) 挨拶・開催趣旨説明

藤本 元啓(初年次教育学会会長)

(2) 実践報告

佐藤 広子(創価大学)

「全学必修化とライティングセンターにおけるチュータリングサービス」

井下 千以子(桜美林大学)

「初年次教育で求められる文章表現・ライティング指導とは何か」

藤本 元啓(崇城大学)

「初年次教育におけるライティング指導の回顧と展望」

(3) 休憩、意見・感想書きタイム

(4) フロアと意見交換

(5) 総括・挨拶

安永 悟(久留米大学)

概要:

当日は50名を超える参加者があった。交流会の後にとったアンケート結果によれば(回答者数40名)、初年次教育学会の会員が18名、日本リメディアル教育学会の会員が9名、創価大学職員が1名、その他16名であった(複数回答あり)。報告内容について「大いに満たされた」18名、「概ね満たされた」20名、「やや不満が残る」1名であった。

4. 久留米「授業づくり研究会」

日 時：2018年10月13日(土)13:00～17:00

会 場：久留米大学御井キャンパス学生会館ミーティングルーム3

プログラム：

(1) 挨拶・導入

安永 悟(久留米大学)

(2) 実践・研究報告

和田 珠実(中部大学)

「LTDによる初年次英語リーディング授業の活性化—自己効力感を中心に—」

甲原 定房(山口県立大学)

「ゲームを用いた授業とそのアレンジ」

(3) 全体交流・閉会

概 要：

協同教育研究所「結ゆい風かじ」主催の「授業づくり研究会」を「初年次教育実践交流会」としてお認めいただき、初年次教育学会との共催という形で開催している。参加者は46名であった。

2019年度（令和元年度）

1. 初年次教育実践交流会 in 北陸

日 時：2019年5月11日(土)13:00～17:30

会 場：しいのき迎賓館2F ガーデンルーム

テーマ：「専門教育課程へ繋ぐ初年次教育プログラム」

参加者：51名

プログラム：

(1) 開催趣旨説明

垣花 渉(石川県立看護大学)

(2) 実践事例報告

關谷 晓子(金沢大学)

「臨床検査技師養成課程における科目横断・教員連携による初年次科目の実践例」

山本 啓一(北陸大学)

「初年次教育と専門教育を接続する専門基礎ゼミナールの導入と課題」

本田 康二郎(金沢医科大学)

「大学初年次につけた力をどう繋ぐか—初年次教育から医学教育へ—」

藤本 元啓(崇城大学)

「初年次教育と専門教育との連携接続型教育カリキュラムの構築—大産接続を目指した実学型キャリア教育プログラムの実現に向けて—」

(3) パネルディスカッション

「カリキュラムにおける初年次教育プログラムの位置づけに関する意見交換」

コーディネーター：杉森 公一(金沢大学)

パネラー：關谷 晓子・山本 啓一・本田 康二郎・藤本 元啓

概 要：

今年で4度目の開催となる北陸では、「初年次教育をどのようにカリキュラム全体に組み込むのか」について、教育実践例を4大学に報告いただきました。パネルディスカッションでは、初年次教育のカリキュラムにおける位置づけは以前とかなり変わってきており、「学ぶ順序性」を重視した初年次教育プログラムが展開されていることを共有しました。プログラムは以下の通りです。

2. 授業づくり研究会

日 時：2019年5月18日(土)13:00～17:00

場 所：久留米大学御井キャンパス学生会館ミーティングルーム3

テーマ：「協同学習の考え方と基本的な技法を学び、明日からの授業に活用しよう—新学習指導要領の趣旨とポイントをふまえて—」

参加者：60名

アクティブラーニングの理論的・技法的な基盤となる協同学習の基礎基本を再度確認し、形骸化に陥らない対応策を、協同の精神を中心据えて、参加者の皆さんと議論を深めることを研究会の目的としました。

安永 悟(久留米大学)

「協同学習の基礎基本—形骸化に対する備え—」

須藤 文(久留米大学)

「明日からの授業に活かす協同学習—新学習指導要領の趣旨とポイントをふまえて—」

3. 協同教育フェスタ

日 時：2019年7月20日(土)10:00～17:00

場 所：久留米大学御井キャンパス学生会館ミーティングルーム3

テーマ：「協同学習と探究」

参加者：65名

高等学校の学習指導要領の改訂に伴い、これまでの「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」と名称を変え、探究の重要性が強調されています。また、探究活動は大学教育でも多様に実施されています。本フェスタでは大学におけるPBL(問題解決型学習)の実践例を中心に、協同学習の観点から探究を取り入れた授業づくりについて議論を深めました。

プログラム：

(1) 挨拶・導入

安永 悟(久留米大学)

(2) 理論的解説

安永 悟(久留米大学)

「協同実践力を育む LTD 授業モデル—LTD 基盤型 PBL を手がかりとして—」

(3) 実践研究

小松 誠和・中村 桂一郎・原 樹(久留米大学)・安永 悟

「PBL 形骸化脱却への挑戦」

長濱 文与(三重大学)

「大学初年次における『探究的学び』をどのように実現するか？—全学必修PBL科目の実践を手がかりに—」

(4) 協同教育カフェ(全体交流)

ファシリテーター：須藤 文(久留米大学)

4. 初年次教育実践交流会 in 九州

日 時：2019年10月26日(土)13:00～17:30

会 場：崇城大学M号館303・306教室

テーマ：「初年次教育プログラムの取組と成果そして課題」

参加者：69名

プログラム：

(1) 趣旨説明

藤本 元啓(崇城大学)

(2) 実践事例報告

渡邊 淳子(熊本保健科学大学)

「熊保大チュートリアルシステム『アカデミックスキルⅠ～Ⅲ』とアカデミックスキルラボについて」

向井 洋子(熊本学園大学)

「『フレッシュマンキャンプ』と『基礎演習』をふまえて」

今井 亮佑(崇城大学)

「『SOJO セミナー』と『SOJO 基礎Ⅰ・Ⅱ』について」

(3) 初年次教育のあらたな位置づけ

川越 明日香(熊本大学)

「深い学びを保証する初年次教育改革の取り組み」

藤本 元啓(崇城大学)

「学士課程教育における初年次教育の位置づけ」

(4) パネルディスカッション

題 目：「これまでの初年次教育とこれからの初年次教育」

コーディネーター：成田 秀夫(大正大学)

パネラー：垣花 渉(石川県立看護大学)・川越 明日香・藤本 元啓

概 要：

熊本での初年次教育実践交流会は2014年以来の開催となりましたので、県内の熊本学園大学、熊本保健科学大学、崇城大学の3大学におけるAL型の初年次教育プログラムの取組事例の報告からスタートしました。各大学の取組の目的、内容、運営、成果、課題等について、まずは情報の共有ができるべと考えました。さらに巨視的な立場から、現在の初年次教育の課題や展望に関する報告とパネルディスカッションも行いました。九州各県はもとより、遠方の東京、石川、徳島、高知からの参加もあり、質問も多く盛会でした。

2020年度(令和2年度)

1. 初年次教育実践交流会 in 北陸

日 時：2020年11月28日(土)13:00～15:55

会 場：オンライン開催

テーマ：「コロナ禍で生まれた初年次教育の取組」

参加者：44名

今年で5度目の開催となる北陸では、コロナ禍での学生コミュニティの形成、ステューデント・スキル、およびアカデミック・スキルの獲得に関する教育実践例を5大学に報告いただきました。パネルディスカッションでは、コロナ禍での授業形態、および学生支援に関する課題と展望を共有するとともに、授業設計やカリキュラムデザインの重要性を議論いたしました。プログラムは以下の通りです。

(1) 開催趣旨説明

垣花 渉(石川県立看護大学)

(2) 実践事例報告

本田 康二郎(金沢医科大学)

「コロナ禍中の学生指導—金沢医科大学モデルの提案」

澤田 忠幸(石川県立大学)

「オンライン授業・ハイフレックス授業で駆け抜けた初年次教育 2020—混乱と学び」

鈴木 大助(北陸大学)

「初年次生を対象としたプログラミング入門科目におけるオンライン授業の教育効果」

井上 咲希(金沢大学)

「コロナ禍でのアカデミック・アドバイジング」

垣花 渉・学生諸氏(石川県立看護大学)

「学生の、学生による、学生のための新入生支援—学生自治会の事例—」

(3) パネルディスカッション

題 目：「ポストコロナにおける初年次教育の課題と展望」

コーディネーター：藤本 元啓(崇城大学総合教育センター)

パネラー：本田 康二郎・澤田 忠幸・鈴木 大助・井上 咲希・垣花 渉・学生諸氏

2. 授業づくり研究会

日 時：2020年11月14日(土)13:30～17:30

場 所：オンライン開催

テーマ：「協同学習の考え方と基本的な技法を学び、明日からの授業に活用しよう—新学習指導要領の趣旨とポイントをふまえて—」

参加者：78名

内 容：

(1) 講演挨拶・導入

安永 悟(久留米大学)

(2) 講演

講 師：鮫島 輝美(京都光華女子大学)

題 目：「関係からすべてがはじまる—新しい人間観からみる協同教育の可能性—」

(3) 協同教育カフェ：須藤 文(久留米大学)

(4) 連絡・閉会：安永 悟(久留米大学)

(5) オンライン情報交換会

総括：

鮫島先生によるガーゲンの社会的構成主義は大変魅力的な内容で、今後の協同教育を考えるうえで、参考になる視点が沢山ありました。

須藤先生に進行をお願いした「協同教育カフェ」も好評で、グループごとに熱のこもった対話が展開しました。

今回の研究会、Webによる初めての開催でした。新しい時代の新しい研究会をどうにかスタートすることができました。今後も、参加者の皆さんと一緒に、新しい研究会を模索していきたいと思います。

3. 協同教育研究会

日 時：2021年2月27日(土)13:40～17:00

場 所：オンライン開催

テーマ：「協同学習と探究」

参 加 者：41名

内 容：

事前オープン

(1) 挨拶・導入

安永 悟(久留米大学)

(2) 講演

須藤 文(久留米大学)

「授業通信を通して考える初回授業の大切さ」

水野 正朗(東海学園大学)

「高等学校国語科において求められる資質・能力を育むための授業づくり」

(3) 連絡・閉会

安永 悟(久留米大学)

(4) オンライン情報交換会

総括：

Zoom開催に変わってから、これまで以上に、全国各地から、高等教育関係者を中心に、参加者が増えてきました。

須藤先生による講演は、教職課程の道徳授業で実際に使った「授業通信」を課題文として、各自の授業との関連づけを行い、グループごとに交流しました。水野先生の講演では「ジーンズ」という詩をグループで読み解く作業を通して、高等学校国語科で実践されている授業づくりの実際を知ることができました。両方とも、これまでの実践に裏打ちされた内容であり、各自の授業づくりに大変参考になる内容でした。

なお、Web授業における協同学習の実践方法についての意見交換もなされ、充実した時間を過ごすことができました。

2021年度（令和3年度）

1. 初年次教育実践交流会 in 北陸

日 時：2021年10月23日(土)13:00～16:00

会 場：しいのき迎賓館ガーデンルーム

形 式：対面・遠隔同時開催

テーマ：「コロナ禍における『学生中心の授業』を考える—初年次教育の課題と展望—」

参加者：48名

プログラム：

(1) 開催趣旨説明

垣花 渉(石川県立看護大学)

(2) 実践事例報告

垣花 渉(石川県立看護大学)

「実技科目の魅力再認識—自己を表現・発見すること—」

小椋 賢治(石川県立大学)

「オンラインオンライン授業における双方向コミュニケーション」

堀井 祐介(金沢大学)

「金沢大学全体での取組—オンデマンド・ハイブリッドへの切り替え—」

西村 秀雄(金沢工業大学)

「コミュニケーション改善のための授業内 LMS 活用—初年次教育への応用可能性—」

(3) パネルディスカッション

題 目：「コロナ禍における初年次教育アクティブラーニングの成果と課題」

コーディネーター：藤本 元啓(崇城大学)

パネラー：垣花 渉・小椋 賢治・堀井 祐介・西村 秀雄

概 要：

今年で6度目の開催となる北陸では、初めてハイブリッド方式による交流会を開きました。コロナ禍の遠隔授業では補いきれない対面授業の大切さと効果を改めて確認した教育実践例を4大学に報告いただきました。パネルディスカッションでは、「コミュニケーション」をキーワードに、初年次学生に対する遠隔授業のメリット・デメリットについて共有するとともに、初年次学生を自律した学修者へ導くための方策を議論いたしました。

2. 協同教育研究会

日 時：2021年12月4日(土)14:00～17:00

方 法：Zoomによるオンライン開催

参加者：45名

概 要：

下記の内容で協同教育研究会を開催しました。オンラインで開催したので、北海道から沖縄まで、全国各地からの参加がありました。

(1) 挨拶・導入

安永 悟(久留米大学)

(2) Zoomの「ブレイクアウトルーム」を用いた仲間づくり(自己紹介)

(3) 協同学習の基礎基本の確認

(4) 研修「わかる力を育てるための要約・作文トレーニング」

担 当：坂東 實子(敬愛大学・明治大学・東京学芸大学)

内 容：「〇文字以上で書け」という課題の弊害か、文字数をみたすために冗長な文章を書く学生が多い。要約練習は、「わかる力(読む力)」「わかりやすく伝える力(書く力)」を育む。今回はそのトレーニングの紹介と、さらに、わかったことを自分の体験・知識に結び付け、新たな問題意識を提示してまとめる400字作文を書くということを通して、課題文の知識が自分の中に定着しそれをもとに考えを展開することを楽しむ体験を行った。

(5) 何でも相談会

担 当：須藤 文(久留米大学)

内 容：参加者の皆さんの交流を兼ねて、協同教育に関する「お悩み」を共有する時間を設けた。

実践交流会 in 北陸からみえてきた開催のヒント

初年次教育実践交流会を頻回に開催している地域は、北陸のほかには九州のみである。したがって、北陸地区でそれを継続できている理由を推察することは、今後ほかの地域へ実践交流会を波及させるという点において、重要な意味を持つものと考えられる。

継続できている理由の1点目は、拠点校の存在であろう。初年次教育の牽引的な役割を果たす金沢工業大学が火付け役となり、北陸地区での初年次教育実践交流会を2015年度に起ち上げた。学会理事の藤本 元啓会員(金沢工業大学、現在は崇城大学)を中心に、金沢工業大学の学会会員がテーマの設定、プログラムの立案(日時や会場校の設定、演者の選定、総合討論の内容等)、会場の準備、当日の運営方法等のモデルをつくった。このようなモデルを学会理事の筆者が引き継ぎ、石川県内の会員との協働のもと、企画・広報・準備・当日運営を担っている。

継続できている理由の2点目は、プラットフォームの形成である。実践交流会を重ねるごとに、初年次教育に関心を持つ石川県内の教育関係者が集まるようになり、初年次教育の実践について分け隔てなく意見交換を続けている。各々がそれぞれの仕事に勤しむなか、集まれるときに、集まれる人が集うという「ゆるいつながり」を大切にしている。このようなゆるくも、自由に意見を言える雰囲気の中からテーマが生まれ、テーマに沿った演者が選出され、総合討論の話題が設定されている。

継続できている理由の3点目は、人材の活用である。プラットフォームの形成により、誰が、何に関心を持ち、どのようなことを得意とするのかが自然と共有されている。実践交流会を開催するためには、例えば全体の統括、企画の発案、広報活動、会場設営、司会進行、コメンテーターなど、さまざまな役割が求められる。このような役割を誰に任せると円滑に進むのかを関係者同士が理解しており、それぞれの得意な分野で力を発揮するという分業が確立されている。

以上の3点は、どの地区でも十分持ち合わせている要素と思われる。あなたの地区でも初年次教育実践交流会を始めてみませんか。

垣花 渉(石川県立看護大学)

「地域活動活性化」に期待すること

より望ましい教育の実現をめざした教育関係者による主体的な活動が全国各地で行われています。それは気心の知れた仲間が集う不定期の小さな勉強会だったり、規模の大きな定期的な研修会だったりします。大学や専門学校などが組織的におこなう場合、SD (Staff Development) 活動と呼ばれることもあります。その規模と形態や内容は多種多様ですが、そこに集う仲間たちは教育の質向上を願い、真摯な気持ちで学び続けているという点において共通しています。彼らの活動を支援することを目的に、初年次教育学会には地域活動活性化委員会が設けられています。本委員会の規程には「会員の求めに応じて、地域における初年次教育の普及と情報交換を行い、教育実践の事例を共有する場として実践交流会を企画・運営し、または支援する(委員会規程第2条)」とあります。本稿では、この地域活動活性化委員会の取り組みについて、その成り立ちと現状、今後に向けての期待も含めて簡単に述べることにします。

本委員会の源は2013年に設置が認められた「地域活動活性化ワーキンググループ」まで遡ることができます。2013年といえば学会設立から6年目にあたります。学会としての活動が一定の軌道に乗り、新たな活動を模索し始めた時期でした。そのなかで「初年次教育の質を高めるためには、これまで以上に会員相互の活発な情報交換が必要になります。地域別に草の根的な研究集会を開催することも一案」とする考えが示されました(初年次教育学会誌 第6巻 第1号、巻頭言)。このような考えのもと「地域活動」の活性化をめざした学会としての活動が「実践交流会」という名称のもと始まりました。この活動の主体はあくまでも会員であり、学会は実践交流会を支援することを基本的な立場としていました。主催者である会員からの要望に応じて、計画から実践に至るまでの諸活動を積極的に支援するという立場です。この立場は、先に紹介した規程にある「会員の求めに応じて」という但し書きにあるとおりです。

地域活動活性化委員会が支援する実践交流会は着実に実績を上げてきました。なかでも定期的に開催されている北陸や九州の実践交流会は質量とも充実した内容となっており、今後の展開が期待されています。また、単発的な実践交流会も幾つか開催されました。地域にある複数の大学が組織運営する集会や、大学単体が主催するSD研修会を支援した実績もあります。なお、関連した企画として本学会主催の「地域研究フォーラム」を2014年に岩手大学において開催しました。このフォーラムは学会の課題研究の一環として位置づけられており、厳密に言えば実践交流会とは区別されます。しかし、当時会員の少なかった東北の学会活動を活性化するという点において両者は同じ目的に沿った活動でした。地域活動活性化ワーキンググループの立ち上げにより、学会全体が地域活動の活性化に総力をあげて取り組み始めていたことが伺えます。

この地域活動の活性化をめざしたその後の取り組みは、実践交流会の「広がり」という観点から見る限り、残念ながら、低調な状況にあるといわざるを得ません。この背景には種々の原因が複合的に絡まっていると考えるのは当然です。なかでも2016年に実施された大学におけるSD活動の義務化が大きく影響しているように思えます。この義務化により、SD活動の企画・準備・運営などが大学組織内で完結する状況が生み出されました。

これにより学会が関与する余地が制限されたと考えています。今後、地域活動を活性化するためには、全国各地で多数開催されている大学等が主催する SD 活動との連携の可能性を探ることも、実践交流会を広げるひとつの手段になると思います。

一方で、地域活動を活性化する新たな方策を考える必要があります。当初考えていた草の根的な活動の発掘と支援が上手くいかなければ、次の手段を考えるべきです。一案として、学会主催の実践交流会を全国各地で展開することも考えられます。現時点では「会員の求めに応じて」とはありますが、この受動的な姿勢を改め、学会が主体的かつ積極的に実践交流会を全国で展開する時期に来ていると思います。実際、北陸で開催されている実践交流会は委員会主催です。この先駆けとして、先にあげた「地域研究フォーラム」開催の実績を指摘することができます。例えば、全国を幾つかのブロックに分け、ブロックごとに「地域研究フォーラム」を開催することも考えられます。ブロックごとに拠点大学を設けて、そこを中心に地域での活動を活性化することも考えられます。

地域活動活性化ワーキンググループを立ち上げた当時の想いは、各地で開催されている小規模な活動を支援し、それらの活動を結びつけることで、地域に根ざした新たな活動を創造する。そのことが、学会本体の活動にもよい影響を与える、日本の初年次教育のみならず教育全体に望ましい影響を及ぼすと期待していました。この想いを実現するために、いまこそ学会の叡知を集め、社会や時代の変化に柔軟に対応しながら、会員の皆さんのが日常的におこなっている教育活動に寄り添った支援ができる「地域活動活性化」の新たな取り組みが展開することを切に望んでいます。

安永 悟(久留米大学)

初年次教育学会におけるこれまでの役員一覧

役員等名簿 (2008 年度)

会長：山田 礼子（同志社大学）

理事（○は常任理事）

- | | |
|---------------|-------------------|
| 足立 寛（立教大学） | 岩井 洋（関西国際大学） |
| 沖 清豪（早稲田大学） | ○川島 啓二（国立教育政策研究所） |
| ○川嶋 太津夫（神戸大学） | ○菊池 重雄（玉川大学） |
| 笹金 光徳（高千穂大学） | 杉谷 祐美子（青山学院大学） |
| ○舘 昭（桜美林大学） | 智原 哲郎（大阪女学院大学） |
| 中村 博幸（京都文教大学） | ○濱名 篤（関西国際大学） |
| ○藤田 哲也（法政大学） | 藤本 元啓（金沢工業大学） |
| 安永 悟（久留米大学） | ○山田 礼子（同志社大学） |
| 山本 泰（東京大学） | 横山 千晶（慶應義塾大学） |

理事の担当

学会誌編集：○川嶋・○足立・杉谷・藤田・横山

研究研修：○菊池・○岩井・藤本・安永

企画総務：○濱名・○山本・沖・笹金・中村

（○が各担当内の責任者。○は補佐）

監査：吉原 恵子（兵庫大学）・小島 佐恵子（北里大学）

事務局長：川島 啓二（国立教育政策研究所）

事務局幹事：白川 優治（千葉大学）

役員等名簿(2009年度)

会長：山田 礼子(同志社大学)

会長代行：川嶋 太津夫(神戸大学)

理事(○は常任理事)

- | | |
|------------------|----------------|
| 足立 寛(立教大学) | 出光 直樹(横浜市立大学) |
| ○岩井 洋(帝塚山大学) | ○沖 清豪(早稲田大学) |
| 川島 啓二(国立教育政策研究所) | ○川嶋 太津夫(神戸大学) |
| 菊池 重雄(玉川大学) | ○笛金 光徳(高千穂大学) |
| 杉谷 祐美子(青山学院大学) | 館 昭(桜美林大学) |
| 塚原 修一(国立教育政策研究所) | 中村 博幸(京都文教大学) |
| 成田 秀夫(学校法人河合塾) | ○濱名 篤(関西国際大学) |
| ○藤田 哲也(法政大学) | ○藤本 元啓(金沢工業大学) |
| 南 学(横浜市立大学) | 安永 悟(久留米大学) |
| ○山田 礼子(同志社大学) | 横山 千晶(慶應義塾大学) |

理事の担当(○が各担当内の責任者)

- 学会誌編集委員会：○川嶋(2巻1号発刊まで)・○藤田(2巻1号発刊後)・足立・杉谷・成田・南・横山
研究担当：○濱名・館・塚原・安永
広報・情報化担当：○沖・中村
総務担当：○岩井・出光・南
年次大会担当：○笛金・川島・菊池
国際化ワーキンググループ：川嶋・菊池

監査：森下 稔(東京海洋大学)・白川 優治(千葉大学)

事務局長：藤本 元啓(金沢工業大学)

事務局幹事：西村 秀雄(金沢工業大学)

役員等名簿(2010年度)

会長：山田 礼子(同志社大学)

会長代行：川嶋 太津夫(神戸大学)

理事(○は常任理事)

- | | |
|------------------|----------------|
| 足立 寛(立教大学) | 出光 直樹(横浜市立大学) |
| ○岩井 洋(帝塚山大学) | ○沖 清豪(早稲田大学) |
| 川島 啓二(国立教育政策研究所) | ○川嶋 太津夫(神戸大学) |
| 菊池 重雄(玉川大学) | ○笹金 光徳(高千穂大学) |
| 杉谷 祐美子(青山学院大学) | 館 昭(桜美林大学) |
| 塚原 修一(国立教育政策研究所) | 中村 博幸(京都文教大学) |
| 成田 秀夫(学校法人河合塾) | ○濱名 篤(関西国際大学) |
| ○藤田 哲也(法政大学) | ○藤本 元啓(金沢工業大学) |
| 南 学(横浜市立大学) | 安永 悟(久留米大学) |
| ○山田 礼子(同志社大学) | 横山 千晶(慶應義塾大学) |

理事の担当(○が各担当内の責任者)

- 学会誌編集委員会：○藤田・足立・杉谷・成田・横山
研究担当：○濱名・館・塚原・安永
広報・情報化担当：○沖・中村
総務担当：○岩井・出光・南
年次大会担当：○笹金・川島・菊池
国際化ワーキンググループ：川嶋・菊池

監査：森下 稔(東京海洋大学)・白川 優治(千葉大学)

事務局長：藤本 元啓(金沢工業大学)

事務局幹事：西村 秀雄(金沢工業大学)・柄内 文彦(金沢工業大学)

役員等名簿(2011年度)

会長：山田 礼子(同志社大学)

会長代行：川嶋 太津夫(神戸大学)

理事(○は常任理事)

足立 寛(立教大学)	井下 千以子(桜美林大学)
○岩井 洋(帝塚山大学)	○沖 清豪(早稲田大学)
川島 啓二(国立教育政策研究所)	○川嶋 太津夫(神戸大学)
菊池 重雄(玉川大学)	○笹金 光徳(高千穂大学)
杉谷 祐美子(青山学院大学)	館 昭(桜美林大学)
中村 博幸(京都文教大学)	成田 秀夫(学校法人河合塾)
西 誠(金沢工業大学)	西村 秀雄(金沢工業大学)
○濱名 篤(関西国際大学)	○藤田 哲也(法政大学)
○藤本 元啓(金沢工業大学)	安永 悟(久留米大学)
○山田 礼子(同志社大学)	横山 千晶(慶應義塾大学)
海老澤 信一(文京学院大学：第5回大会大会校理事 会長指名による)	

理事の担当(○が各担当内の責任者)

学会誌編集委員会：○藤田・足立・杉谷・成田・横山

研究担当：○濱名・井下・館

広報・情報化担当：○沖・中村

総務担当：○岩井・西・西村

年次大会担当：○海老澤・笹金・川島・安永

国際化ワーキンググループ：川嶋・菊池

監査：森下 稔(東京海洋大学)・白川 優治(千葉大学)

事務局長：藤本 元啓(金沢工業大学)

事務局幹事：西村 秀雄(金沢工業大学)・西 誠(金沢工業大学)・柄内 文彦(金沢工業大学)

役員等名簿(2012年度)

会長：山田 礼子(同志社大学)

会長代行：川嶋 太津夫(神戸大学)

理事(○は常任理事)

- | | |
|-----------------------------------|----------------|
| 足立 寛(立教大学) | 井下 千以子(桜美林大学) |
| ○岩井 洋(帝塚山大学) | ○沖 清豪(早稲田大学) |
| 川島 啓二(国立教育政策研究所) | ○川嶋 太津夫(神戸大学) |
| 菊池 重雄(玉川大学) | ○笹金 光徳(高千穂大学) |
| 杉谷 祐美子(青山学院大学) | 館 昭(桜美林大学) |
| 中村 博幸(京都文教大学) | 成田 秀夫(学校法人河合塾) |
| 西 誠(金沢工業大学) | 西村 秀雄(金沢工業大学) |
| ○濱名 篤(関西国際大学) | ○藤田 哲也(法政大学) |
| ○藤本 元啓(金沢工業大学) | 安永 悟(久留米大学) |
| ○山田 礼子(同志社大学) | 横山 千晶(慶應義塾大学) |
| 海老澤 信一(文京学院大学：第5回大会大会校理事 会長指名による) | |

理事の担当(○が各担当内の責任者)

- 学会誌編集委員会：○藤田・足立・杉谷・成田・横山
研究担当：○濱名・井下・館
広報・情報化担当：○沖・中村
総務担当：○岩井・西・西村
年次大会担当：○海老澤・笹金・川島・安永
国際化ワーキンググループ：川嶋・菊池

監査：森下 稔(東京海洋大学)・白川 優治(千葉大学)

事務局長：藤本 元啓(金沢工業大学)

事務局幹事：西村 秀雄(金沢工業大学)・西 誠(金沢工業大学)・柄内 文彦(金沢工業大学)

役員等名簿(2013年度)

会長：安永 悟(久留米大学)

会長代行：井下 千以子(桜美林大学)

理事(○は常任理事)

○井下 千以子(桜美林大学)

○沖 清豪(早稲田大学)

川嶋 太津夫(大阪大学)

笛金 光徳(高千穂大学)

関田 一彦(創価大学)

中村 博幸(京都文教大学)

西 誠(金沢工業大学)

○濱名 篤(関西国際大学)

○藤本 元啓(金沢工業大学)

○山田 礼子(同志社大学)

○岩井 洋(帝塚山大学)

川島 啓二(国立教育政策研究所)

○菊池 重雄(玉川大学)

杉谷 祐美子(青山学院大学)

田中 岳(九州大学)

成田 秀夫(学校法人河合塾)

○西村 秀雄(金沢工業大学)

○藤田 哲也(法政大学)

○安永 悟(久留米大学)

横山 千晶(慶應義塾大学)

理事等の担当(○が各担当内の責任者。編集委員会の「※」は非理事)

学会誌編集委員会：○藤田・足立 寛※・笛金・杉谷・塙原 修一※・絹川 直良※

研究担当：○濱名・井下・川嶋・関田

広報・情報化担当：○沖・中村

総務担当：○西村・西

国際化ワーキンググループ：○山田・横山

地域活動活性化ワーキンググループ：○菊池・川島・田中・成田

年次大会担当：岩井

監査：白川 優治(千葉大学)・森下 稔(東京海洋大学)

事務局長：藤本 元啓(金沢工業大学)

事務局幹事：西村 秀雄(金沢工業大学)・西 誠(金沢工業大学)・柄内 文彦(金沢工業大学)

役員等名簿(2014年度)

会長：安永 悟(久留米大学)

会長代行：菊池 重雄(玉川大学)

理事(○は常任理事)

- | | |
|----------------|------------------|
| 井下 千以子(桜美林大学) | ○岩井 洋(帝塚山大学) |
| ○沖 清豪(早稲田大学) | 川島 啓二(国立教育政策研究所) |
| 川嶋 太津夫(大阪大学) | ○菊池 重雄(玉川大学) |
| ○笛金 光徳(高千穂大学) | 杉谷 祐美子(青山学院大学) |
| 関田 一彦(創価大学) | 田中 岳(九州大学) |
| 中村 博幸(京都文教大学) | 成田 秀夫(学校法人河合塾) |
| 西 誠(金沢工業大学) | ○西村 秀雄(金沢工業大学) |
| ○濱名 篤(関西国際大学) | 藤田 哲也(法政大学) |
| ○藤本 元啓(金沢工業大学) | 安永 悟(久留米大学) |
| ○山田 礼子(同志社大学) | 横山 千晶(慶應義塾大学) |

理事等の担当(○が各担当内の責任者。編集委員会の「※」は非理事)

学会誌編集委員会：○笛金・絹川 直良※・足立 寛※・杉谷・塚原 修一※・藤田

研究担当：○濱名・井下・川嶋・関田

広報・情報化担当：○沖・中村

総務担当：○西村・西

国際化ワーキンググループ：○山田・横山

地域活動活性化ワーキンググループ：○菊池・川島・田中・成田

年次大会担当：○岩井

監査：白川 優治(千葉大学)・森下 稔(東京海洋大学)

事務局長：藤本 元啓(金沢工業大学)

事務局幹事：西村 秀雄(金沢工業大学)・西 誠(金沢工業大学)・柄内 文彦(金沢工業大学)

役員等名簿(2015年度)

会長：安永 悟(久留米大学)

会長代行：菊池 重雄(玉川大学)

理事(○は常任理事)

井下 千以子(桜美林大学)	岩井 洋(帝塚山大学)
○沖 清豪(早稲田大学)	○川島 啓二(九州大学)
川嶋 太津夫(大阪大学)	○菊池 重雄(玉川大学)
○笛金 光徳(高千穂大学)	杉谷 祐美子(青山学院大学)
関田 一彦(創価大学)	田中 岳(九州大学)
成田 秀夫(学校法人河合塾)	西 誠(金沢工業大学)
西村 秀雄(金沢工業大学)	○濱名 篤(関西国際大学)
○藤田 哲也(法政大学)	○藤本 元啓(金沢工業大学)
○安永 悟(久留米大学)	○山田 礼子(同志社大学)
山本 啓一(九州国際大学)	横山 千晶(慶應義塾大学)

理事等の担当委員会(○が委員長。学会誌編集委員会の「※」は非理事)

学会誌編集委員会：○笛金・絹川 直良(文京学院大学[副委員長])※・沖・塙原 修一(関西国際大学)※・望月 由起(昭和女子大学)※・横山

総務委員会：○川島・西村

地域活動活性化委員会：○藤本・成田・山本

研究委員会：○濱名・井下・川嶋・関田

将来構想実行委員会：○山田・岩井・杉谷・田中

広報・情報化委員会：○沖・西

年次大会担当：谷川裕稔大会校理事(四国大学)

監査：菊地 滋夫(明星大学)・山崎 千鶴(玉川大学)

事務局長：藤田 哲也(法政大学)

事務局幹事：藤本 元啓(金沢工業大学)・加藤 みづき(法政大学)

役員等名簿(2016年度)

会長：安永 悟(久留米大学)

会長代行：菊池 重雄(玉川大学)

理事(○は常任理事)

- | | |
|----------------|----------------|
| 井下 千以子(桜美林大学) | 岩井 洋(帝塚山大学) |
| ○沖 清豪(早稲田大学) | ○川島 啓二(九州大学) |
| 川嶋 太津夫(大阪大学) | ○菊池 重雄(玉川大学) |
| ○笛金 光徳(高千穂大学) | 杉谷 祐美子(青山学院大学) |
| 関田 一彦(創価大学) | 田中 岳(東京工業大学) |
| 成田 秀夫(学校法人河合塾) | 西 誠(金沢工業大学) |
| 西村 秀雄(金沢工業大学) | ○濱名 篤(関西国際大学) |
| ○藤田 哲也(法政大学) | ○藤本 元啓(崇城大学) |
| ○安永 悟(久留米大学) | ○山田 礼子(同志社大学) |
| 山本 啓一(北陸大学) | 横山 千晶(慶應義塾大学) |

理事等の担当委員会(○が委員長。学会誌編集委員会の「※」は非理事)

総務・広報委員会：○川島・西・西村

地域活動活性化委員会：○藤本・成田・山本

学会誌編集委員会：○沖・望月 由起(昭和女子大学[副委員長])※・横山・笛金・絹川 直良(文京学院大学)※・塚原 修一(関西国際大学)※

研究委員会：○濱名・井下・川嶋・関田

将来構想実行委員会：○山田・岩井・杉谷・田中

年次大会担当：大西 直之(中部大学；会則第11条第2項に基づく、会長指名による
第11回大会校理事)

監査：菊地 滋夫(明星大学)・山崎 千鶴(玉川大学)

事務局長：藤田 哲也(法政大学)

事務局幹事：藤本 元啓(崇城大学)・加藤 みづき(法政大学)

役員等名簿(2017~2018年度)

会長：藤本 元啓(崇城大学)

会長代行：菊池 重雄(玉川大学)

理事(会長・会長代行以外)：

井下 千以子(桜美林大学)	岩井 洋(帝塚山大学)
沖 清豪(早稲田大学)	川島 啓二(京都産業大学)
川嶋 太津夫(大阪大学)	笹金 光徳(高千穂大学)
杉谷 祐美子(青山学院大学)	関田 一彦(創価大学)
田中 岳(東京工業大学)	成田 秀夫(学校法人河合塾)
西村 秀雄(金沢工業大学)	濱名 篤(関西国際大学)
藤田 哲也(法政大学)	森 朋子(関西大学)
安永 悟(久留米大学)	山田 剛史(京都大学)
山田 礼子(同志社大学)	山本 啓一(北陸大学)

理事の担当分担(○は各担当の責任者、編集委員会の※は非理事)

学会誌編集委員会：沖 清豪(2017年度委員長)・川島 啓二(2018年度委員長)・

森 朋子・白川 優治※(千葉大学)・望月 由起※(日本大学)・

横山 千晶※(慶應義塾大学)

課題研究活動委員会：○濱名 篤・井下 千以子・川嶋 太津夫・関田 一彦

総務・広報委員会：○西村 秀雄・笹金 光徳・山田 剛史

将来構想実行委員会：○山田 礼子・岩井 洋・杉谷 祐美子・田中 岳

地域活動活性化委員会：○安永 悟・菊池 重雄・成田 秀夫・山本 啓一

年次大会担当：第10回大会 大西 直之(中部大学)・第11回大会 大和田 秀一
(酪農学園大学)(会則に基づく会長指名による大会担当理事)

監査：菊地 滋夫(明星大学)・山崎 千鶴(玉川大学)

事務局長：藤田 哲也(法政大学)

事務局幹事：西 誠(金沢工業大学)・加藤 みづき(多摩大学)

役員等名簿(2019~2020年度)

会長：藤本 元啓(崇城大学)

会長代行：安永 悟(久留米大学)

理事(会長・会長代行以外)：

井下 千以子(桜美林大学)	沖 清豪(早稲田大学)
川島 啓二(京都産業大学)	川嶋 太津夫(大阪大学)
垣花 渉(石川県立看護大学)	菊地 滋夫(明星大学)
笹金 光徳(高千穂大学)	杉谷 祐美子(青山学院大学)
関田 一彦(創価大学)	田中 岳(東京工業大学)
成田 秀夫(大正大学)	西村 秀雄(金沢工業大学)
濱名 篤(関西国際大学)	藤田 哲也(法政大学)
森 朋子(関西大学)	山田 剛史(京都大学)
山田 礼子(同志社大学)	山本 啓一(北陸大学)

理事の担当分担(○は各担当の責任者、※は非理事)

学会誌編集委員会：○川島 啓二, 田中 岳, 森 朋子, 白川 優治※(千葉大学),
大嶋康裕※(崇城大学), 立石慎治※(国立教育政策研究所)
課題研究活動委員会：○濱名 篤, 井下 千以子, 川嶋 太津夫, 山田 剛史
総務・広報委員会：○西村 秀雄, 笹金 光徳, 沖 清豪
将来構想実行委員会：○山田 礼子, 杉谷 祐美子, 山本 啓一
地域活動活性化委員会：○安永 悟, 成田 秀夫, 垣花 渉
大会運営委員会：○藤田 哲也, 関田 一彦, 藤本 元啓, 加藤 みづき※(多摩大学)
年次大会担当：第13回大会 藤波 潔(沖縄国際大学)

監査：森下 稔(東京海洋大学), 山崎 千鶴(玉川大学)

事務局長：菊地 滋夫(明星大学)

事務局幹事：加藤 みづき※(多摩大学), 西 誠※(金沢工業大学), 藤田 哲也(法政大学),
御厨 まり子※(明星大学)

役員等名簿(2021～2022年度)

会長：藤田 哲也(法政大学)

会長代行：藤本 元啓(崇城大学)

理事(会長・会長代行以外)：

井下 千以子(桜美林大学)	沖 清豪(早稲田大学)
垣花 渉(石川県立看護大学)	川島 啓二(京都産業大学)
川嶋 太津夫(大阪大学)	菊地 滋夫(明星大学)
笹金 光徳(高千穂大学)	清水 栄子(追手門学院大学)
杉谷 祐美子(青山学院大学)	田中 岳(岡山大学)
成田 秀夫(山梨学院大学)	西村 秀雄(金沢工業大学)
濱名 篤(関西国際大学)	藤波 潔(沖縄国際大学)
森 朋子(桐蔭横浜大学)	山田 剛史(関西大学)
山田 礼子(同志社大学)	山本 啓一(北陸大学)

理事の担当分担(○は各担当の責任者, ※は非理事)

学会誌編集委員会：○田中 岳, 井下 千以子, 大嶋 康裕※(崇城大学), 岩崎 千晶※(関西大学), 立石 慎治※(筑波大学), 宮浦 崇※(九州工業大学), 千葉 美保子※(甲南大学), 間渕 泰尚※(神戸親和女子大学)

課題研究活動委員会：○濱名 篤, 森 朋子, 山田 剛史, 山田 礼子

総務・広報委員会：○笹金 光徳, 沖 清豪, 杉谷 祐美子

将来構想実行委員会：○山本 啓一, 川島 啓二, 川嶋 太津夫

地域活動活性化委員会：○成田 秀夫, 垣花 渉, 藤本 元啓

大会運営委員会：○藤田 哲也(第14回大会まで), 藤波 潔(第14回大会終了後),

清水 栄子, 西村 秀雄, 関田 一彦※(創価大学), 加藤 みづき※(多摩大学),

小西 英行※(多摩大学)

監査：森下 稔(東京海洋大学), 山崎 千鶴(玉川大学)

事務局長：菊地 滋夫(明星大学)

事務局幹事：鈴木 浩子※(日本薬科大学), 西 誠※(金沢工業大学), 御厨 まり子※(明星大学), 山田 剛史(関西大学)

初年次教育学会 15 周年記念誌編集委員会

編集責任 山本 啓一(北陸大学)
編集協力 藤田 哲也(法政大学)

初年次教育学会 15 周年記念誌

2024 年 3 月 15 日 印刷 編集者 初年次教育学会 15 周年記念誌編集委員会
2024 年 3 月 31 日 発行 代表者 藤田 哲也

印刷所
株式会社 国際文献社
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 332-6
(電話) 03-6824-9363

発行所
初年次教育学会

事務局分室
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター
初年次教育学会事務局
(電話) 03-6824-9372
(FAX) 03-5227-8631
(e-mail) jafye-office@as.bunken.co.jp
(HP) <http://www.jafye.org/>

事務局
関西大学 山田 剛史研究室

Japanese Association of First-Year Experience at Universities and Colleges

15th Anniversary

— *The Past and Future* —